

新時代に対応した高等学校改革推進事業
【普通科改革支援事業】

実施報告書（第1年次）

聖 ヨゼフ学園

日星高等学校

目次

I 巻頭言	1
II 研究概要	2
III コーディネーター活動状況レポート	20
IV 運営指導委員会の記録	22
V コンソーシアム会議の記録	26
VI 2024 年度 総合的な探究の時間「舞 Way！」の実施報告	33
VII 3 年生「選択舞鶴」実施報告書	42
VIII 資料	49

本校は、海の京都 舞鶴市にある唯一の私立高校です。人口減少、過疎化が進行する地方都市において、私立高校としてできることは何かを考えたとき、学校の役割を「地域のコミュニティとしての学校」ととらえ、学校づくりに挑戦しています。

京都府舞鶴市は、令和2年までの5年間で人口が83,990人から80,336人へと減少し、特に、若年層の減少、高齢者層の増加により労働力不足や社会保障負担の増大など社会的・経済的な課題が顕著になっています。また、本校生徒の自宅通学圏には大学がほとんどなく、進学する生徒は親元を離れ下宿しなければなりません。こうした状況がUターンする若者を減らす原因にもなっていると考えられます。このような状況下にある地方都市は多く存在します。

本校の教育プログラムの研究開発は、そうした地方都市における地方創生に向けた先進事例として全国に示すことができると考えています。

そうした中、本校は、令和6年度、文部科学省より「普通科改革支援事業」及び「DXハイスクール」の指定を受け、新たな改革の一步を踏みだしました。生徒が地域を学びのフィールドとした探究活動を行うことによって、社会に積極的に参画し、様々な年代の人々と交流しながら自己有用感を高め地域財産や文化を深く理解し、ICTを駆使した産官学民の連携によるDXに取り組んでいます。今年度は、二つの研究指定がうまく重なり合い、探究活動の流れの中に生成AIも活用した学習活動を組み込んで実施することができました。

特に、学校づくりの柱を「探究と創造」とし、教科横断型の教育課程の開発を行い、その成果を生徒の発表会とともに公開研究会として公開し小中学校を含めた「学校を基盤とした地域のコミュニティ」となる学びの場、新たな地域を創造する学びの場の構築に向けた教育方法の研究開発をめざしています。その成果として、令和8年度には「地域未来科（仮称）」がスタートします。

こうした普通科改革支援事業に指導助言をいただく運営指導委員の皆様、コンソーシアム委員の皆様からは貴重な進言を多数いただき、研究開発が動いています。特に、「舞Way!」と名付けた総合的な探究の時間は全ての教員がゼミの形で生徒の探究活動に伴走し、連携する大学の学生のサポートも受けながらカリキュラムを動かすことができました。その結果、9月と3月に実施した調査では、生徒の意識や行動に変化が起こりつつあることがうかがえます。

また、本校の普通科改革の取り組みとして総合的な探究の時間だけでなく、教育学の知見を生かした教科の授業や生徒会活動、部活動を含む教育活動全体が生徒の主体的・協働的で探究的な学びの場になっているかを検証し教育活動を展開してきました。特に、QFT（Question Formulation Technique）や対話型論証、スクールワイドPBSなどの知見を活用した授業の実践事例は、外部の研究会などで発表することができました。

本報告書は、日星高校の研究指定1年目の実践を記録したものです。同様の課題に挑戦されている高校の学校づくりの参考になれば幸いです。

研究概要（6 年度申請時）

1 事業の概要(事業実施計画書)

(1) 学際領域学科又は地域社会学科等を設置する学校名・設置（予定）年度

公立・私立・ 国立・株立の別	学校名 (ふりがな)	学科の種類	設置（予定） 年度	決定
私立	日星高等学校 (にっせいこうとうがっこう)	地域社会学 科	令和 8 年度	

(2) 学校の詳細

課程別	新学科の 収容定員	学年制・ 単位制の別	学科の名称（決定している場合）
全日制	40 名/学年	学年制	地域未来学科

(3) 当該学科における特色・魅力ある先進的な教育の取組について

生徒が地域を学びのフィールドとした探究活動を行うことによって、社会に積極的に参画し、様々な年代の人々と交流しながら自己有用感を高め、地域財産や文化を深く理解し、ICT を駆使した産官学民の連携により DX を推進する。探究を中心に据えた教科横断型教育課程の開発と実践を行うとともにその成果を公開研究会などで発信し、高校が小中学校も含めた「学校を基盤とした地域のコミュニティ」となる場、新たな地域を創造する学びの場の構築に向けた研究を行ない、生徒たちが実践的な課題解決能力（主体性・探究性・協働性）を身につける教育方法を開発する。

具体的な令和 6 年度以降の学校づくりの柱を「探究」と「創造」とし、具体的には以下のような教育活動を展開し、新たな高等学校のカリキュラムと教育方法の研究開発を行う。

1 探究学習による学校改革

「舞 Way！」（総合的な探究の時間）のカリキュラム開発

すでに、先行して実施している探究活動を、コーディネーターの採用により地域をフィールドとした探究活動として再構築し、地域をベースにした生徒の探究活動と未来社会の創造力を高める支援者として相応しい教員の在り方、カリキュラムを研究開発する。また、その効果検証として、探究とキャリアとの関連についてどのような効果があったのか卒業後の生徒のアンケート調査などにより高校入学から社会人までのトランジションとリエゾン支援の観点から研究者とともに分析を行う。

「舞 Way！」を水曜日 5,6 時間目に全教員の指導により全学年で、ゼミ制により実施し、各ゼミのリーダーと探究主任及びコーディネーターがカリキュラムの実施と改善について情報交換を行い全教職員のサポートを行う。

2 教育学の知見を生かした教育活動-レディメイドから日星高校版オーダーメイドへ -

総合的な探究の時間だけでなく教科の授業、生徒会活動、部活動を含め教育活動全体が生徒の主体的、協働的、探究的な学びの場となっているかを検証し、教育活動を展開する。

具体的には、教科の授業（看護科も含め）で QFT（Question Formulation Technique）、対話型論証、スクールワイド PBS など教育学の知見を生かした授業にすることで探究活動を支える教科の学習をより探究的なもの、探究のサイクルを意識したものに変えていく。そのためには、令和 5 年度に行ってきた公開授業研究を含めた校内研修会を令和 6 年度以降も月 1 回ペースで開催し、全員が学び合う場をつくる。

教職員全員、STEAM を「探究と創造のサイクル」および「教科横断的な視点」として捉え教育活動に取り組む。

3 研究活動の公開

「日星プロジェクト ゼロ」という研究活動を公開する場を設定し、生徒の探究活動の公開や教職員の授業の公開などを行い、生徒の活動を多くの人に見てもらい評価してもらうことや義務教育の関係者も加えた授業研究会を行う。

こうした教育活動を外に開くことで生徒の探究活動のサポーターが増え、学校を中心に地域のネットワークを広げていくこともできるのではないかと考えて取り組む予定である。

教育学の研究者として立命館大学の柏木智子教授に運営指導委員に加わっていただくとともに令和 5 年度からほぼ月 1 回、探究や授業改革に関する校内研修会を担当した元大学教員（教育学）が校長に就任し、教育学研究者のネットワークを通じて大学と連携し、課題に合わせた研究者を招聘して教員研修などを外部公開し、取り組んでいく予定である。

2 事業の目的等

(1) 学際領域学科又は地域社会学科等を設置する高等学校を取り巻く状況の分析、学際領域学科又は地域社会学科等を設置する必要性

1 状況の分析

舞鶴市は、令和2年（2020年）時点で国勢調査の総人口が80,336人であり、平成27年（2015年）の83,990人から減少傾向にある。特に15歳未満の若年層は13.5%から12.4%に減少し、一方で65歳以上の高齢者層は30.5%から32.5%に増加している。この人口構造の変化は、地域社会の未来に大きな影響を与えることが予想される。

また、若年層の減少と高齢者層の増加により、労働力不足や社会保障負担の増大などの社会的、経済的課題が顕著になっている。地域の持続可能性を確保するためには、若者の定住促進と高齢者の活躍支援が重要である。

2 地域社会学科の必要性

舞鶴市に地域社会学科を設置することは、以下の点で重要である。

- ・若者の地域への関与促進：若者が地域課題に関心を持ち、地域社会に貢献する機会を提供する。
- ・地域社会の問題解決：この地域固有の問題に対する実践的な学びを通じて、地域の持続可能性を高める。
- ・持続可能なまちと社会の作り手の育成：地域社会の課題を把握し、多様な役割を担う人材を育成し、社会的・経済的活性化に貢献する。

舞鶴市のような人口減少が進む地域において、地域社会学科の設置は、地域の再生と発展に向けた重要な一歩となる。舞鶴市及び類似の地域社会の持続可能な未来に向けた高校の教育活動を研究開発することで日本の他の地域、特に京都府北中部の課題を解決するための先行事例となることが期待される。

3 地域社会学科等を設置する必要性—今までの取り組みを発展させた取り組みへの移行—

パナソニック教育財団の助成を受け、ICTを活用した地域密着型の総合的な探究の時間の取り組みや舞鶴市役所の協力のもと地域課題の解決に向け生徒が考案と提案するなどのプロジェクト「V(バーチャル)市役所」は、地域社会への具体的な貢献を目指した。また、一般社団法人KOKINとの協力により、「日星ゼミ」という別のプログラムも展開し、地域資源のイノベーション方法を学び、自分たちにできることは何かを考え、行動宣言を行っている。また、ユネスコスクールの加盟による学生語り部や国際交流などの活動にも取り組んできている。このような活動の中で本校独自の調査結果ではあるが、生徒たちは地元舞鶴への興味・関心を深め自己肯定感を高める結果となった。こうした状況をふまえて、地域社会学科を設置して取り組む教育プログラムは、生徒たちが地域社会に積極的に参画し、その過程で様々な年代の人々と交流しながら非認知能力を高め、地域財産や文化を深く理解する。本校教員が代表を務める学生と地域の方々が集まるコミュニティースペース「KATARIBA」での活動、現存するコワーキングスペース「CVM」、本校元校長の水嶋が代表管理人として運営する「みんなあの庵場所・彦一郎」の活用方法の検討やコンソーシアム会議を通して、今までに培ってきた舞鶴市、一般社団法人KOKINとの協力体制の中で、お互いにとって価値のある持続可能な効率の良い教育プログラムを作成する。さらに、デジタル技術を活用して、地元企業、行政、教育機関、市民が連携し、共通の課題解決に取り組むプラットフォームを構築する。これにより、革新的なアイデアやソリューションの創出を促進することにつながる。こうした能力を持った生徒を育成するためにも、本校は、地域社会学科を設置する必要性がある。

（２）地域社会学科等における取組の目的・目標（学際領域学科又は地域社会学科等における教育を通じて育成を目指す資質・能力を含む）

１ 地域社会学科における取組の目的

この取り組みの特徴は、生徒が地域社会の一員として積極的に参加し、貢献する機会を提供することによって生徒の非認知能力の向上を目指すことにある。また、生徒自身の行動が地域にポジティブな影響を与えることを実感することにより生徒の「主観的 Well being」を向上させ、本校教育目標である「人と共に生き、人のために役立つ、心豊かな人に」を実現させる。

(1) 探究を軸とした教科横断型教育課程の開発と実践

地域をフィールドとして自らの関心や問題意識を持ち、様々な教科の知識や技術を統合して探究活動に取り組む教育課程を開発・実践する。このアプローチにより、批判的思考力、問題解決力、創造力を育成し、非認知能力の向上を目指す。

(2) 多世代の交流による地域の財産や文化の継承

幼児から高齢者まで、多様な世代が参加する交流プログラムを実施し、地域の伝統や文化、歴史を継承する、そのことは、世代間の絆を強化し、人との繋がりの中で自分の役割を実感することにより、生徒の自己有用感を育てる。

(3) ICT 活用した産・官・学・民の連携による DX の推進

この事業を行うにあたり、デジタル技術を活用して、生徒が地域の企業、行政、教育機関、市民と連携し、共通の課題解決に取り組むプラットフォームを構築する。これにより、地域社会や学校風土の改革や、革新的なアイデアやソリューションの創出を促すことにつなげる。

２ 地域社会学科等における取組の目標

本校を卒業し進学をする生徒は、自宅通学圏内に大学がほとんどなく、親元を離れ、下宿をしなければならない。この状況が U ターンする若者を減らす一因になっていると考える。また、高校卒業後、地元就職をする生徒も一定数ある。このような状況下である地方都市は多く存在する。この取り組みを通じて、高等教育を受ける際に自宅からの通学が困難な、人口 5～6 万都市での地方創生に向けた高校の教育プログラムの実践例として、全国に示すことができる。また、この事業を通して、コンソーシアム、関係機関等との連携・協力体制の構築のもとで、地域のコミュニティの中核としての学校の在り方を考えていきたい。

(1) 地元舞鶴に戻ってくる人材の育成

「地域未来学」により、校外の企業や研究機関と共に活動することで、地元の魅力を再確認し、地元を活性化させることを大学進学目的とする生徒を育てる。その生徒が総合選抜等で大学進学をすることにより、都市部で高等教育を受けた若者が地元舞鶴（近畿北部を含む）に戻り、地域発展に貢献する人材を育成する。

(2) 持続可能な舞鶴市の創造

高校卒業後、地元に残る人材と戻ってくる人材が融合し、新たなビジョンやアイデアを生み出す「化学反応」を促す。これにより、共に持続可能な舞鶴市を作り上げることを目指す。

(3) 地域の私立高校としての役割

舞鶴市唯一の私学として、公立高校ができないものを生み出す。探究活動を行うことで、学校の教育活動を地域に開く。そうした中で、生まれてきた様々な課題を、コンソーシアム等を通して市民全体で共有し、議論することになれば、学校が地域に開かれたコミュニティの中核となる可能性もある。そうした視点も含めて本事業を展開する。

3 実施体制

(1) 管理機関における実施体制や事業の管理方法

○実施体制

1 管理機関の役割

日星高校が、地域社会学科の設置に向けた検討をする中で、教育課程の編成や新しい学校設定科目の設置に関する支援を行っている。

また、運営指導委員会を設置し、大学等の有識者に指導・助言、成果に関する評価を依頼し、本事業の運営を行っていく予定である。

教職員研修支援やコーディネーターの採用も行っており、同校におけるICT活用に関する教員・生徒への支援のため、公立高校に先立って配置してきた、ICT支援員を引き続き置く。

2 コンソーシアムの構成及び役割

コンソーシアムは、多面的な立場から多くの助言をいただくだけでなく、生徒の活動を支援して、教育活動の充実に繋ぐことになる。本事業終了後も、日星高校の教育活動を支援する体制としてコンソーシアムは継続していく予定である。コンソーシアムは立案された計画や、実施状況に基づく助言等を踏まえて、プロジェクト全体に対する提案・支援等を行う。実際の活動において求められる支援としては、事業実施中のプロジェクトに対する新たな視点からの提言や、その実現を可能にする外部人材の紹介・調整等がある。また、コンソーシアム関係者にも各教科の授業や課題研究活動の講師などの支援者として、伴走を依頼する予定である。

3 コーディネーターの配置

4年間の経験を持つコーディネーターを採用することができている。コーディネーターは、京都府京丹後市に地域おこし協力隊として採用され、京丹後市内にある京都府立峰山高等学校に出向し、教員とともに探究学習のカリキュラム編成や授業運営、地域プレイヤーや大学と高校生を繋ぐコーディネーターとして学校の探究学習を動かす推進役となってきた人材である。

4 教育活動支援

管理機関である学校法人においては、これまで、パナソニック教育財団の助成を受け、ICTを活用した地域密着型の総合的な探究の時間の取り組みや、ユネスコスクールの加盟による活動などを支援してきた。また、令和5年度は、6回の教職員研修や探究活動先進校視察を支援してきた。今後も同様の支援を行う予定である。

○事業の管理方法

各年度、カリキュラム再編の検討のための校内会議を各学期2回の年間6回計画し、令和5年度よりも多い校内研修や先進校との情報交換等を計画している。こうした事業を管理し、適切に事業が行われるよう指導するとともに、会議の内容について報告を受け、法人の理事会（外部理事を含む）・評議会において助言等を行う。

運営指導委員会として委任した方々は先進的な地域をフィールドとした探究活動支援の経験が豊富なメンバーであり、地域社会学科の設置に向けて、高校と地域との協働の視点から専門的なアドバイスをいただくこととしている。本事業が法人全体の財産となるよう管理・運営する。

（２）管理機関における事業全体の成果検証、評価のための体制、考え方

○事業全体の成果検証について

本事業の成果検証については、以下のように管理機関が責任を持って実施し、日星高校にフィードバックすることとしている。

１ 運営指導委員会及びコンソーシアム代表者会議における、進捗状況の確認及び改善点等の協議

- ・日星高校が研究成果発表会や各種発表会へ参加し、幅広く情報を発信する
- ・外部機関が行う高校生の研究発表会への参加
- ・年度の後半に行う研究発表会
- ・卒業生の追跡調査を行い、高校での活動が自身のキャリア形成に与えた影響などの調査
- ・探究活動などについての生徒の振り返りの調査などを行い会議で、そのデータをもとに成果の検証・評価を行う。

○評価のための体制・考え方

評価については、日星高校が本事業において目指している目的・目標が達成されているかに注目し行う。

校内や運営指導委員会等からの評価体制に加え、保護者、地域の人や卒業生などにもアンケート等を実施し、より多くの人から評価してもらう予定である。

その結果は、事業の運営に生かすこととしたい。

生徒が参加するコンテストや発表会への応募、ホームページやSNS、フリーペーパーなどでの情報発信などを行いたい。

また、具体的な成果目標については、目標設定シートにある以下の観点に加えて社会性も加味し行っていくこととする。

- ・主体性：探究課題等の自己決定と活動を尊重し、失敗しても良いという安心安全な雰囲気と支援する体制
- ・協働性：グループでの学習や調査、多様性の尊重（人と違うことが尊重されること）、立場を超えた協働の機会
- ・探究性：地域の人や課題などにじかに触れ、自ら問いを立てて課題解決に向けた提案が行える
- ・社会性：地域の人や課題などにじかに触れる機会がある。地域の課題や興味をもったことについて橋渡しをしてくれる大人がいる

その他

生徒による３年間の地域探究活動を通して、地域を担う人材としての資質・能力の向上、大学等進学者数のうち、将来出身地での就職を考えている生徒数、高等学校卒業後及び大学等卒業後の出身地への就職者数の割合などについても、年度末に、成果検証とともにこれらの評価を行い、実施内容やカリキュラムなどを修正し、その成果を広く発信していく学科を設置したいと考えている。

（３）学際領域学科又は地域社会学科等を設置する高等学校における事業の管理方法

○事業の管理方法

令和２年度からパナソニック教育財団の支援による探究活動において、本校が築き上げてきた実施体制をベースに新たな評価視点を加えて本事業の管理を行う。

本校では、令和６年度から本事業を推進するための組織改革を行った。本校には、校務分掌としてキャリア推進部があるが、本事業を実施すれば、事業が生徒の在り方生き方につながるとの視点をもとに探究推進部とキャリア推進部を統合し、探究活動に取り組む生徒の情報を共有しながらキャリア支援を行っていく体制に変更した。

令和２年度からは、地域をフィールドとした探究活動に取り組んできた。その成果は、令和５年度、２年生が、福知山公立大学主催の「田舎力甲子園」において舞鶴市の放置竹林を活用したおにぎりの商品開発のアイデアを発表し、最優秀賞に次ぐスポンサー賞を受賞するという結果となって表れている。

また、昨年、大学コンソーシアム京都が開催した「高大社フューチャーセッション」には定員の１／３を本校生徒が占めるなど外部の学習機会に積極的に生徒が参加するようになった。こうした、生徒の外部での活動への参加は、学校としての評価の材料として参加生徒の振り返りも含めて把握し評価の対象としていく。

○具体的な方策

(1) 地域社会とつながる授業

「舞 Way！」（「総合的な探究の時間」）では、ゼミによって授業を進める予定であり、各ゼミのリーダーと探究主任、コーディネーターが探究活動の進捗状況や生徒の活動状況について定期的（最低、月に一度）に情報交換を行って把握し、支援の必要性などを検討し、スムーズに取り組みが進むように全校で支援を行う。ゼミの中に「舞鶴ゼミ」を設置し、令和６年度においては、３年生の学校設定科目「選択舞鶴」において教材を開発し「地域未来学」のベースをなるものを作る。

また、学校設定科目「地域未来学」においては、研究テーマごとに、複数の担当教員を配置し、全教職員が探究活動に関わることとし、研究グループごとに毎時間生徒が活動記録を記入し、担当教員が確認することで毎時間の活動の記録及び管理を行う。

これまで行ってきた日星ゼミなどの実施体制をベースに多様な資質・能力、興味・関心を持つ生徒が、より主体的に活動することができるよう、個人探究活動の集合としてのグループ探究活動の在り方や、探究サイクルの動かし方など探究活動の新たな実施体制づくりに取り組む。

(2) 教育学の知見を生かした教科の授業展開

研究授業を含めた教員研究会を年間６回実施し、全員で生徒の活動を検証する。

(3) 本事業の中核となる教員の役割

ゼミグループごとの連携や担当教員のサポートを行う。また、ゼミグループの担当教員やゼミリーダーが定期的に情報交換を行い、生徒のサポートについて話し合ったりしやすい環境を作る。また、コーディネーターと日常的に会話を行うことで校内外の人材の交流を促進していきたい。

(4) コーディネーターの役割

外部とのハブになり、地域における探究活動のスムーズな実施のための連携を構築する。コーディネーターは職員室に常駐しながら時間を見つけて地域に出向きネットワークを構築する。

（４）管理機関及び申請校における研究開発の実績

１ パナソニック教育財団の助成事業

研究課題「SDGs 未来都市舞鶴市を通して地方創生を考える」

令和２年からの３年間、パナソニック教育財団の助成を受け、ICTを活用した地域密着型の総合的な探究の時間の取り組みを実施した。これは、まちづくりや、地域の未来クリエイターを育てるプログラムであり、生徒たちが地域社会とのつながりを深め、実践的な学習経験を積むことを目的としたものである。

１年生では、舞鶴市役所の協力のもと、地域課題の解決に向けた生徒による考案と提案を行ってきた。このプロジェクトは「V(バーチャル)市役所」と称し、地域社会への具体的な貢献を目指したものである。また、一般社団法人 KOKIN との協力により、「日星ゼミ」という別のプログラムも展開し、地域の財産を再確認し、行動宣言を行っている。

２年生では、地元企業 10 数社の協力を得て、より具体的な職業体験を提供するインターンシップを実施している。このインターンシップを通じて、生徒たちは「地域で働くことは、誰かの役に立つこと」「地域で働く意義」について深く考える機会を持ち、実社会の一端に触れる経験を得ている。

３年生では、こうした学びを統合し、卒業論文を通して自己の学びを振り返り深めるプロセスを経験している。この論文は、後輩に向けて発表する「卒業論文報告会」でのプレゼンテーションなどを通じて、自己表現の重要性と学問的な深みを追求している。

３年間の取り組みを通じて、生徒たちは自己を振り返り、自分に合った進路を選択する力を育くんでいる。生徒アンケートの結果によれば、自己有用感の向上と地元舞鶴に対する意識の深化が明らかになっている。

令和５年度においては、２年生が、福知山公立大学主催の「田舎力甲子園」において、舞鶴市の放置竹林を活用したおにぎりの商品開発のアイデアを発表し、最優秀賞に次ぐスポンサー賞を受賞した。

２ ユネスコスクールの認定による活動

令和４年 11 月よりユネスコスクールに加盟し、生徒によるユネスコ世界記憶遺産である引揚記念館での語り部の活動や、ウズベキスタンとの交流を通じて地元の歴史や文化について学んでいる。こうした取り組みの中、第 15 回ユネスコスクール全国大会において、本校教員がデジタルシティズンシップと探究をテーマに分科会で実践報告者として、その成果を発表した。

３ 地域の中学校との連携

令和５年度より舞鶴市立城南中学校、舞鶴市立和田中学校と探究を通じての交流を実施しており、日星高校の校内研修に和田中学校教員が参加し、和田中学校校内研修に日星高校教員が参加するなど地域の中学校との研修による接続を行っている。また、城南中学校 ２年生の探究の授業にアドバイザーとして日星高校教員が２名参加するとともに、１年生の SDGs と地方創生について考える探究学習にも日星高校教員が講師として支援している。

４ 一般社団法人 KOKIN 等との連携

「まちを楽しむひとを増やす」をミッションとして様々な活動に取り組んでいる一般社団法人 KOKIN と連携し、生徒がまちづくりの活動に参加している。

５ 組織改革と教職員研修の実施

令和５年度は、探究を推進するため 7 回の校内研修会を実施。探究学習のカリキュラム、教員の伴走、課題の設定、公開授業の振り返り、問いづくり演習など教育学の知見と演習を行い、令和６年度の教育活動がスムーズに行えるよう組織を改編した。

（５）運営指導委員会の体制

所属	氏名	主な実績
福知山公立大学地域経営学部	准教授 杉岡 秀紀	地域公共人材の育成研究。多くの自治体の支援に携わる。
福知山公立大学地域経営学部	准教授 大門 大朗	持続可能な社会の研究。
龍谷大学経営学部	准教授 眞鍋 邦大	食・農・ローカルビジネスの領域に実務と研究の両面から取り組む。
立命館大学産業社会学部	教授 柏木 智子	文部科学省中央教育審議会臨時委員など、多方面で学校づくりに関わっている。
一般社団法人 KOKIN	代表 大滝 雄介	地元にＵターンし、まちづくりチームを立ち上げ活動。
舞鶴市市民環境部	部長 吉田 雅樹	舞鶴市の担当部長 地域と若者をつなぐ。
株式会社ローカルフラッグ	代表 濱田 祐太	本校の姉妹校である暁星高等学校出身、大学生時代に地域の旗振り役を担うローカルベンチャーを企業する。

（６）運営指導委員会が取り組む内容

運営指導委員会を年３回開催し、カリキュラム開発などについて専門的な立場から指導助言や評価などを行う。また、授業の参観や成果発表会など機会あるごとに生徒の取り組みについて参観し審査や講評などのアドバイスを行う。特に、コーディネーターの役割や学校の組織についてのアドバイス、地元の機関や関係団体等との連携について助言、学校が公表する事業評価目標についての中間及び年度末評価などをもとに改善点などの指導を行う。さらに、生徒の考案したプロジェクトなどについてアントレプレナー等の見地から評価と改善点などのアドバイスを行う。

4 地域社会学科等における取組

（１）地域社会学科等におけるカリキュラムや教育方法等の特色・魅力ある先進的な教育の内容

令和 6 年度以降の学校づくりの柱を「探究」と「創造」とし、具体的には、以下のような教育活動を展開し、新たな高等学校のカリキュラムと教育方法の研究開発を行う。

1 探究学習を軸にした教育課程の編成による学校改革

「舞 Way！」（総合的な探究の時間）のカリキュラム開発

先行して実施している探究活動を、コーディネーターの採用により地域をフィールドとした探究活動として再構築し、地域をベースにした生徒の探究活動と未来社会の創造力を高める支援者として相応しい教員の在り方、カリキュラムを研究開発する。また、その効果検証として、探究とキャリアとの関連についてどのような効果があったのか卒業後の生徒のアンケート調査などにより高校から社会人までのトランジションとリエゾン支援の観点から研究者とともに分析を行い、カリキュラムマネジメントに生かす。

「舞 Way！」を、看護科を含めて全学年、水曜日 6 時間目に配置し、（普通科総合コースは 5, 6 時間目 2 単位）全教員の指導により全学年で、ゼミ制により実施する。

各ゼミのリーダーと探究主任及びコーディネーターがカリキュラムの実施と改善について情報交換を行い、進捗状況を把握し探究のサイクルの回し方を定期的に検証し、全教職員のサポートを行う。

1 年生の「舞 Way」で学んだことをもとに「地域未来学Ⅰ, Ⅱ」で地域の問題や課題を解決するための実践を通して自己のキャリア形成を行う。

「地域未来学Ⅰ」（2 年生）では地域のステークホルダーと関わりながら探究やプロジェクト活動を実施、評価する。「地域未来学Ⅱ」（3 年生）では探究やプロジェクトで得られた成果や経験を集約、ポートフォリオを作成することにより、プロジェクト管理、リーダーシップ、チームワーク、コミュニケーションスキルなどの能力を発展させる

2 教育学の知見を生かした教育活動の展開ーレディメイドから日星高校版オーダーメイドへー

総合的な探究の時間だけでなく教科の授業、生徒会活動、部活動を含め教育活動全体が生徒の主体的、協働的、探究的な学びの場となっているかを検証し、教育活動を展開する。

具体的には、教科の授業（看護科も含め）で QFT（Question Formulation Technique）対話型論証、スクールワイド PBS など教育学の知見を生かした授業にすることで探究活動を支える教科の学習をより探究的なもの、探究のサイクルを意識したものに変えていく。そのためには、令和 5 年度に行ってきた公開授業研究を含めた校内研修会を令和 6 年度以降も月 1 回ペースで開催し、全員が学び合う場をつくる。教職員全員が STEAM を探究と創造のサイクル、教科横断として取り組むという視点でカリキュラムをとらえ教育活動に取り組む。

3 研究活動の公開

「日星プロジェクト ゼロ」という研究活動を公開する場を設定し、生徒の探究活動の公開や教職員の授業の公開などを行い、生徒の活動を多くの人に見てもらい評価してもらうことや義務教育の関係者も加えた授業研究会を行う。義務教育から高校教育そして、大学、社会人へのトランジションという観点から高校のカリキュラムを義務教育関係者や大学教員を交えて議論できるカリキュラムを発信していきたい。

こうした教育活動を外に開くことで生徒の探究活動のサポーターが増え、学校を中心に地域のネットワークを広げていくこともできるのではないかと考えて取り組む予定である。

（２）コンソーシアム等の関係機関等との連携・協力体制の構築の考え方・方法

1 地域探究 地域との連携

これまでの KOKIN など地域の団体や事業所との連携を一層進める。

また、協働での商品開発、創業体験などにも取り組むチャンスをつくる。

2 放課後等の学校外につながる探究的な学び

総合的な探究の時間等で見つけた課題や自分の興味関心を広げ・発展させる実践の場として、学校外でのプロジェクトに参加したり、やってみたい活動を企画・運営したりする時間と場を提供する。（舞鶴聖母幼稚園 KATARIBA 舞鶴支援学校）

3 小・中学校・高校等との連携・協働の推進

本校が、舞鶴市の探究のメッカとして小・中学校の「総合的な学習の時間」をバックアップする。

本校の探究学習発表会及び研修会の開催・出前授業、公立高校との交流授業を行う。

4 高等教育機関との連携・協働

福知山公立大学や龍谷大学と提携し、本校生徒の大学での学びの機会、大学生による学びのナビゲーターなどを通して、探究活動を豊かなものにする。

5 ユネスコスクールとして世界とつながる

ASPnet; (Associated Schools Network) を活用し、探究のヒントや探究の成果の発信を行う。

これらをつなぐものとして日星高校魅力化構想会議（コンソーシアム）を設立する。

SDGs 未来都市の舞鶴市や企業、大学など、産・官・学・民からなる「コンソーシアム(連携協力体制)」を構築し、連携・協働を図り、教育改革を円滑かつ効果的に進める。

（３）コンソーシアムの構成員

舞鶴商工会議所	和田 員之	日星高校生の探究サポート
舞鶴市教育委員会	前田 暁代	小中高の連携を支援
舞鶴市役所	西 忠幸	舞鶴市市役所企画政策課 企画調整係長
一般社団法人 KOKIN	大滝 雄介	まちづくりチームの立ち上げと高校生のプロジェクト支援
福知山公立大学	杉岡 秀紀	地域公共人材の育成研究。多くの自治体の支援に携わる。
京都府立大学	窪田 好男	政策の評価、地方創生戦略において舞鶴市をサポート。
舞鶴市観光協会	植本 浩明	舞鶴市観光協会会長 新しい観光価値の発掘に携わる。
庵・彦一郎	水嶋 純作	高校生の探究活動を支援、日星高校学校経営アドバイザー、公認心理師
KATARIBA	原田 翔太	舞鶴市地域おこし協力隊 まちづくり団体 my link 副代表

(4) 配置するコーディネーターの属性や役割

所属	氏名
学校法人聖ヨゼフ学園	能勢ゆき

当該者の主な実績

令和2年2月から現在まで京都府京丹後市に地域おこし協力隊として採用され、京丹後市内にある京都府立峰山高等学校に出向し、教員とともに探究学習のカリキュラム編成や授業運営、また地域プレイヤーや大学と高校生を繋ぐコーディネーターとして学校の探究学習を動かす推進役となってきた。また、生徒の総合的な探究の時間中間発表会、最終報告会の企画運営も行い、学校のホームページでの発信も行ってきた。さらに、京丹後市が設置した高校生と地域の方々が集う「京丹後市未来チャレンジ交流センター roots」の運営にも関わり様々な機会にその成果を発信してきた。令和5年度で京丹後市の地域おこし協力隊の任期が終了し、令和6年度より本校のコーディネーターとして勤務している。

コーディネーターが取り組む内容（勤務形態を含む）

1 地域社会学科設置に向けたカリキュラム開発

教職員と協働しながら総合的な探究の時間、地域未来学のカリキュラムを開発し、年間指導計画の作成、外部機関等との連携構築に取り組む。

2 舞鶴市との連携

コンソーシアムとなる関係機関をはじめ、舞鶴市の地域おこし協力隊員と緊密な連携をとりながら、地域の関係機関・団体との連携・協働を推進し、ネットワークを構築する。

3 総合的な探究の時間（舞 Way!）

学校設定科目を担当する教員との協働教職員の一人として、舞 Way!（総合的な探究の時間）がスムーズに動くように担当教員と生徒の状況を情報交換しアドバイスを行うなど探究をサポートする。

各学年の総合的な探究の時間及び新たな学校設定科目のカリキュラムマネジメントを探究担当教員とともに行う。

また、探究を動かす「舞 Way!」ゼミのリーダーとの打ち合わせを行い、教員が行う生徒の伴走や地域のサポーターと生徒との繋ぎ、教員との連携がスムーズに動くようにサポートを行う。

4 探究活動など生徒の活動を発信する

学校全体での取り組みや生徒の探究活動の様子などを学校のホームページなど SNS で発信し、サポートしてくれる大学等との関係者と情報交換を行う。

5 コンソーシアムとの連携

生徒の活動を支援するコンソーシアムの構成員と適宜、情報交換を行い、生徒の活動が動きやすいよう連携を行う。

コーディネーターの勤務形態

勤務時間：1日8時間、週5日勤務（週40時間）

勤務場所：日星高校の職員室に常駐し、校務分掌として「探究キャリア部」の一員となる。

（５）学際領域学科又は地域社会学科等の設置及び設置に向けた検討に関する生徒、保護者、地域等への説明の実施

地域社会学科設置に向け、生徒・保護者、地域の方々へは、各中学校での高校説明会、オープンスクール、学校説明会などのほか、学校のホームページや SNS などでの発信を行う。また、新聞等での広報も行い。多様な機会でも知できるように検討している。また、対象が、現在の中学校 2 年生となるので、早急に準備を進め、新学科設置をアピールしていくこととしたい。今年度は、オープンスクールのアンケート調査により生徒、保護者の意見を聴取する。

その際、舞鶴市が抱える以下の点をもとに地域社会学科設置に向けた検討状況を伝えていく予定である。

１ 状況の分析

舞鶴市は、令和 2 年（2020 年）時点で総人口が 80,336 人であり、平成 27 年（2015 年）の 83,990 人から減少傾向にある。特に 15 歳未満の若年層は 13.5%から 12.4%に減少し、一方で 65 歳以上の高齢者層は 30.5%から 32.5%に増加している。この人口構造の変化は、地域社会の未来に大きな影響を与えることが予想される。

また、若年層の減少と高齢者層の増加により、労働力不足や社会保障負担の増大などの社会的、経済的課題が顕著になっている。地域の持続可能性を確保するためには、若者の定住促進と高齢者の活躍支援が重要である。

２ 地域社会学科の必要性

1 のような状況を踏まえ、舞鶴市に学際領域学科又は地域社会学科を設置することは、以下の点で重要である。

若者の地域への関与促進：若者が地域課題に関心を持ち、地域社会に貢献する機会を提供する。

地域社会の問題解決：この地域固有の問題に対する実践的な学びを通じて、地域の持続可能性を高める。

多様な人材の育成：地域社会における多様な役割を担う人材を育成し、社会的・経済的活性化に貢献する。

舞鶴市のような人口減少が進む地域において、学際領域学科又は地域社会学科の設置は、地域の再生と発展に向けた重要な一歩となる。舞鶴市及び類似の地域社会の持続可能な未来に向けた高校の教育活動を研究開発することで日本の他の地域、特に京都府北中部の課題を解決するための先行事例となることが期待される。

３ 卒業後の進学や就職について

大学進学をめざす人については、以前の普通科のカリキュラムよりも総合型選抜などでは進学目標が明確になり、大学などの高等教育機関からも探究活動に取り組んできた学生の評価が高いこと。就職する生徒に対しても、高校で行ってきた活動が社会人となるにあたってスキルアップにつながり将来を考えるとしっかりとした考え方が育っていくことを説明していく予定である。

5 実施計画

(1) 3ヶ年の実施計画の概要

○令和6年度(1年目)

コーディネーターを配置し、すでに地域に配置されているコーディネーターや本校教員と連携させることで、連携組織を作成する。

コーディネーターと探究推進部の教員を中心に、地域をフィールドとした探究活動を推進する。全学年で総合的な探究の時間を実施するため、1年生と2年生の活動が重なる点が出てくるため進捗状況を調整する。探究活動を取り組むための生徒のハンドブックを作成し、ワークシートの有効性を検証しながら次年度への改善点を検討する。

年間指導計画は、探究のサイクルをどのように回すか、発表の時期をどの時期に設定するのがよいのか、この年度の中間発表会や最終報告会の状況を評価して次年度のカリキュラムを修正する。

また、「探究的な教科の授業」に転換することを同時に行い、その効果を検証する。公開授業を組み込んだ校内研修会を行いながら全員で教育学の知見をもとに学び合う場を年間6回は設定する。令和8年度に新設する学校設定科目のカリキュラム開発を行う。

○令和7年度(2年目)

地域社会学科令和8年度入学生の教育課程の研究及び編成を行う。校内のカリキュラム検討委員会で、大学関係者など外部の専門家の助言を受けつつ生徒にとって最適な教育課程を編成する。令和8年度入学生には、地域社会学科の学科名やカリキュラムなどの構想が固まった時点で、中学校の説明会やホームページ、SNSなどで、特に中学2年生とその保護者に、発信する。地域に対しても、舞鶴市の協力を得ながら、広報活動を行う

現在行っている本校の中学生に対するオープンスクールや各中学校の説明会での情報発信に加え、本校独自の説明会を行うなどして、積極的に新学科設置の趣旨とその魅力の普及に努める。新学科の教育課程を完成させ、管理機関に申請する。

各教科の授業についての公開授業を含めた校内研修会を継続し、教員の資質向上を推進する。

○令和8年度(3年目)

「地域社会学科」を設置。新しい教育課程での授業実践や、地域探究活動などの教育活動を行いながら、その効果や改善点などの確認を行っていく。

長期の検証に加え、KPT法などを用いて教職員が生徒の情報共有を行うなどの方法により、最低、各学期に生徒の変容やカリキュラムの効果などを把握し、カリキュラムの評価を全員で検証しながら、生徒や学校、地域の実態に合った地域社会学科へとブラッシュアップしていく。

コーディネーターの役割や業務内容、地元のコーディネーターとの連携などについても、実態に即した運用ができるように関係者で定期的に協議する。さらに、コーディネーターの効果についても評価を行い、全国でコーディネーターを採用するための指針となるような分析を行う予定である。

(2) 今年度の計画の内容

月	事業の内容	
	カリキュラムや教育方法等の開発	関係機関等との連携・協力体制の構築
4月	生徒：舞 Way！「総合的な探究の時間」のスタート準備、探究の理解、問いづくり演習、ikigai ペン図を用いた学習	コンソーシアムなどの関係機関と協力体制の依頼と調整
5月	生徒：地域をフィールドにした探究課題の設定 教員研修会①（授業研究ほか）	生徒の探究課題をコンソーシアムなどの関係者に公開し支援体制を検討する
6月	生徒：設定した課題をもとに情報収集や調査を行う。調査方法等について講師からサポートを受ける 教員研修会②（授業研究ほか）	第一回運営指導委員会・コンソーシアム会議開催 フィールドワークが可能な期間・団体との調整、大学などの関係者との調整
7月	生徒：設定した課題をもとに情報収集や調査を行う 教員研修会③（授業研究、生徒の情報交換）	フィールドワークが可能な期間・団体との調整
8月	探究に関する伴走について、生徒への対応などを協議	教員の先進校視察（隠岐島前高校） サポートが可能な大学生の派遣等について調整
9月	生徒：探究活動の進捗状況について生徒同士が情報交換を行う（探究カフェの実施） 探究活動を継続 地域訪問学習①	生徒の発表会を参観してコメントやサポートを行う関係者との連携・調整
10月	生徒：探究についての中間発表会を実施 生徒同士が発表をもとに質疑応答を行う。 探究活動の継続 教員研修会④（授業研究、生徒の情報交換）	第二回運営指導委員会・コンソーシアム会議開催 生徒の発表会を参観してコメントやサポートを行う。関係者との連携（講師による発表指導）
11月	生徒：探究活動について、データの分析や考察を行う 教員研修会⑤（授業研究、生徒の変容などの交流）「日星プロジェクトゼロ」①	調査を行っている地域の関係者などにインタビューなどの調査依頼

12 月	生徒：探究活動について、データの分析や 考察を行う 教員：生徒の状況を交流	地域の関係者などとの連携、研究成果発表会へ の参加依頼
1 月	生徒：探究活動について、データの分析や 考察を行う 教員研修会⑥(授業研究、生徒の情報交換) 地域訪問学習②「日星プロジェクトゼロ」 ②	地域の関係者などとの連携、研究成果発表会へ の参加依頼、運営指導委員、コンソーシアム関係 者からのサポート依頼
2 月	研究成果発表会の開催 生徒が探究活動の成果を発表 令和 7 年度のカリキュラムや年間指導計 画についての評価と改善点を協議	生徒への運営指導委員、コンソーシアム関係者 からのサポート（講師による発表指導）
3 月	令和 7 年度のカリキュラムや年間指導計 画について修正	第三回運営指導委員会・コンソーシアム会議開 催

（３）事業の進捗状況の定期的な確認や改善の仕組み

アウトプットについて

本事業における進捗状況の定期的な確認や改善の仕組みについては、校内や運営指導委員会等からの評価に加え、保護者、地域の人や卒業生などにもアンケート等を実施し、より多くの人から評価してもらう予定である。その結果は、事業の運営に生かすこととしたい。また、生徒が参加するコンテストや発表会への応募状況や入賞などのほか生徒の探究活動の事例をホームページやSNS、フリーペーパーなどでの情報発信を行う予定である。

進捗状況の定期的な確認や改善の仕組みについて

生徒の探究活動に対する取り組み状況や探究を行う中での学習や変容などについて、月１回のゼミリーダーと探究主任、コーディネーターで情報を共有し、その結果を全員で共有する。また、学期に２回、生徒の状況などをもとにKPT法で教員が進捗状況の確認と改善点などを出し合いすぐにゼミを通して改善できるような組織として動く予定である。

さらに、年間６回開催予定の教員研修会で状況をもとに深化している点や改善点を出し合い、その後の探究活動や授業に生かしていく予定である。この方法はすでに令和５年度も実施しており、生徒が主体的になり教員の授業が大きく変わった事例や一部の教員から他の教員に実践が波及するなど、教員が教員としての価値観が変わったとコメントする状況が生まれている

アウトカムについて

具体的な成果目標については、目標設定シートにある以下の観点に加えて社会性も加味し、行っていくこととする。この４項目については、『「データと対話」で職場を変える技術 サーベイ・フィードバック入門—これからの組織開発の教科書」中原淳（2020）などの知見を参考に研究を進めていく予定である。

目標成果シートにある観点と社会性は以下のとおりであり、年間複数回調査を行う予定である。

- ・ **主体性**：探究課題等の自己決定と活動を尊重し、失敗しても良いという安心安全な雰囲気と支援する体制
- ・ **協働性**：グループでの学習や調査、多様性の尊重（人と違うことが尊重されること）、立場を超えた協働の機会
- ・ **探究性**：地域の人や課題などにじかに触れ、自ら問いを立てて課題解決に向けた提案が行える
- ・ **社会性**：地域の人や課題などにじかに触れる機会がある。地域の課題や興味をもったことについて橋渡しをしてくれる大人がいる。

6 成果の普及のための仕組み

1 「日星プロジェクト ゼロ」という研究活動を公開する場を設定

生徒の探究活動の公開や教職員の授業の公開などを行い、生徒の活動を多くの人に見てもらい評価してもらうことや義務教育の関係者も加えた授業研究会を行う。義務教育から高校教育そして、大学、社会人へのトランジションという観点から高校のカリキュラムを義務教育関係者や大学教員を交えて議論できるカリキュラムを発信していきたい。

こうした教育活動を外に開くことで生徒の探究活動のサポーターが増え、学校を中心に地域のネットワークを広げていくこともできるのではないかと考えて取り組む予定である。

2 生徒の研究成果報告会

生徒が取り組む探究活動を中間発表会、最終成果報告会という形態で実施し、多くの関係者や保護者に参加を呼びかけ、生徒の活動についてコメントやアドバイスを受ける。

3 学際領域学科又は地域社会学科等の設置校から全国への発信

シンポジウムのような場を設け、オンラインも含めた研究会を行い、全国の学校へ発信する。

4 学会等での発表

教員が、関係する学会に参加し、カリキュラムや生徒の変容などについて研究内容を発表する。

コーディネーター活動状況レポート（2024 年 4 月～2025 年 3 月）

1. 2024 年 4 月～6 月：着任・関係構築・探究の基盤作り

2024 年 4 月にコーディネーターとして日星高等学校に着任し、まずは学校内外の関係者との連携を深めることに注力した。

着任後は、学校関係者との面談や職員会議、地域の方々への挨拶回りを行い、探究活動に関する理解を深めるとともに、外部との協力関係の構築を進めた。市役所や企業訪問を通じて、学校と地域の連携の可能性を探りつつ、探究の授業の在り方について議論を重ねた。

探究の授業が本格的に始まると、生徒たちの活動を観察し、授業の進行をサポート。問い作りの演習や、各ゼミでの活動支援を通して、生徒が探究に主体的に取り組めるような環境整備に努めた。また、探究活動に関わる外部専門家や地域の方々と協力し、授業内でのゲスト講演やプロジェクトの支援を行った。

「KATA Lab」の活用の推進

本校の教員が代表を務める西舞鶴駅前のコミュニティスペース「KATA Lab」は、本校の生徒のみならず、地域の中高生が地域課題に深く関与する重要な場となっている。「KATA Lab」では、生徒が地域住民や専門家と直接交流し、地域資源のイノベーションや新たなソリューションの創出を図る活動が行われている。

特に、プロジェクト型学習の拠点として、「KATA Lab」を活用し、地元企業、行政、教育機関、市民との連携を強化した。具体的には、

- ・生徒が地域課題に向き合い、実践的な解決策を提案・実行する活動を定期的に開催した
- ・探究活動における地域パートナーとのマッチング
- ・地域企業や団体との協働プロジェクトの企画・運営

を進めることで、生徒の学びを地域社会に還元する仕組みを整えていった。

2. 2024 年 7 月～9 月：探究の深化・地域連携の強化

夏休み期間中には、地域との連携をより一層深めるための活動を実施。地域の企業や行政機関とのミーティングを通じて、探究活動での協力体制を構築し、高校生の地域での学びを支援する環境を整えた。

学校では、生徒たちの関心に応じたプロジェクトのサポートを継続し、KATALab. を活用したイベント運営を通じて、生徒が主体的に活動できる場を提供。中間報告会の準備では、生徒が自分のテーマを深めるためのサポートを行い、フィードバックを通じて探究の質の向上を図った。

3. 2024 年 10 月～12 月：探究の発展・実践の場の拡大

10 月に入ると、探究の中間報告会や各種発表会に向けた準備が本格化し、生徒たちが主体的に動くことができるよう、企業や地域の方々とのつながりを活かし、インタビューやフィールドワークの機会を提供した。

また、選択舞鶴のサポートでは、イベント企画を進める生徒たちの相談に乗りながら、プロジェクトの実現に向けた支援を行った。

地域との協働が進み、探究活動が地域の実際の課題解決に結びつくような流れが見え始めた。特に、舞鶴茶のプロジェクトや、親子向けのクリスマスイベントなど、生徒が地域の課題に関わりながら主体的に活動する場が増えていった。

さらに、コーディネーター間の連携も深まり、定期的なミーティングを通じて情報共有や協力体制の強化を図った。

隠岐島前高校や宮津高校など、他校の探究活動を視察することで、日星高校の探究の方向性を見直し、より実践的な学びへと発展させるためのアイデアを得た。

4. 2025 年 1 月～3 月：探究の集大成・次年度への展望

3 学期は、探究の最終報告会に向けた準備が中心となった。

生徒たちは、1 年間の学びをまとめ、発表の準備を進めた。発表内容のブラッシュアップをサポートしながら、発表の場でのコミュニケーションや表現の指導を行い、生徒たちが自分の言葉で学びを語れるような環境を整えた。

最終報告会では、多くの地域の方々が参加し、生徒たちの学びを共有する場となった。生徒による探究の成果発表だけでなく、外部講師による講演も行われ、探究の意義を改めて考える機会となった。

また、次年度に向けたカリキュラムの見直しを開始。今年度の取り組みを振り返りながら、より生徒主体の探究を実現するための改善点を議論。より実践的なプロジェクト型学習や、外部機関との連携強化を進める方向性を検討した。

さらに、コーディネーターとしての活動のまとめとして、報告書の作成を開始。1 年間の振り返りを行いながら、来年度に向けた課題と展望を整理した。

まとめ

この 1 年間、コーディネーターとして学校内外のさまざまな関係者と連携し、探究活動の推進に努めた。生徒が主体的に探究に取り組める環境を整えるため、外部との協力関係を築きながら、地域と学校をつなぐ役割を果たしてきた。

来年度は、これらの基盤を活かし、さらに実践的な探究の場を拡充するとともに、生徒が主体的に地域課題に取り組める仕組みを強化していく。

運営指導委員会の記録

I 第1回運営指導委員会 報告書

1 日時・場所

令和6年10月3日（木） 午前10時～正午
日星高等学校会議室

2 参加者

・運営指導委員

大滝 雄介（一般社団法人 KOKIN 代表）
杉岡 秀紀（福知山公立大学 准教授）
吉田 雅樹（舞鶴市市民環境部 部長）
眞鍋 邦大（龍谷大学 准教授）（オンライン）

・管理機関

小林 圭児（聖ヨゼフ学園 理事長）
小林 圭太（聖ヨゼフ学園 次長）

・本校職員

滋野 哲秀（校長）
中野 佳代（副校長）
吉岡 達也（教頭）
能勢 ゆき（コーディネーター）

3 議題

- ・開会（理事長・校長の挨拶）
- ・運営指導委員長の選出および委員長挨拶
- ・文部科学省「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」に基づく報告・説明
- ・普通科改革に向けた3年間の実施計画等の研究協議
- ・閉会

4 議事録

（1）開会

理事長および校長の挨拶により、会議の趣旨と今後の改革推進への決意が共有され、学校全体の方向性が確認された。

（2）運営指導委員長選出

運営指導委員長、杉岡 秀紀(福知山公立大学 准教授)が選出され、委員長からの挨拶があった。

(3) 報告・説明

本校校長滋野より、文部科学省の「新時代に対応した高等学校改革推進事業」の概要と、日星高等学校の「新時代に対応した高等学校改革推進事業」（普通科改革支援事業）の申請内容が詳細に説明され、今後の改革に向けた前提が確認された。

(4) 研究協議

今後3年間にわたる普通科改革実施計画について、具体的な課題の抽出や解決策の模索、各種プランの検討が活発に議論された。

(5) 内容

- ・探究学習を教育の基軸に据える
- ・探究と原体験
「探究」を教育の根幹とし、原体験から学びを始め、実際のアクションへと展開する流れを強調された。
- ・探究そのものの言語化と、参画意識の明確化が必要とされる。
- ・学校と生活・社会の乖離の是正
- ・学校の学びと日常生活、社会や未来との断絶をどう埋めるかについての議論がなされた。
- ・「何やってもいいよ」という自由だけではなく、必要課題と要求課題の最適なミックス (BEST MIX) が求められる。
- ・実践的学びと評価の多様化
- ・ワークショップや実践の重視
- ・ワークショップの力を活かし、韓国エンタメや韓国語といった異文化や実践を通じた学びの可能性に触れ、伝統的な学問からの脱却を試みる。
- ・卒論について、劇やプレゼンなど従来のレポート形式に縛られない多様な表現方法を認め、個々の生徒が主体的に学びを表現できる環境整備の必要性が指摘された。
- ・地域連携と社会教育の推進
- ・地域の人々との連携を強化し、地域に育てられる学校づくりを推進する。
- ・龍谷大学のオープンキャンパスや、学生主体の運営事例に触れ、学校外との接点を通じた生徒の成長や、地域への影響を実感する機会の創出が示唆された。
- ・プレゼンテーション理論に基づき、単に文字情報を読むのではなく、聴衆の共感を呼び起こす構成の重要性が強調された。

(6) 閉会

滋野校長による閉会挨拶があった。

Ⅱ 第2回 運営指導委員会 報告書

1 日時・場所

令和7年3月11日（月） 午前10時～正午

日星高等学校会議室

2 参加者

・運営指導委員

大滝 雄介（一般社団法人 KOKIN 代表）

杉岡 秀紀（福知山公立大学地域経営学部 准教授）

眞鍋 邦大（龍谷大学経営学部 准教授）

柏木 智子（立命館大学産業社会学部 教授）（オンライン）

・管理機関

小林 圭児（学校法人聖ヨゼフ学園 理事長）

小林 圭太（学校法人聖ヨゼフ学園 次長）

・本校職員

滋野 哲秀（校長）

松崎 真一（教頭）

吉岡 達也（教頭）

青葉 謙一（主幹教諭）

小谷 英里（探究主任）

能勢 ゆき（コーディネーター）

・（オブザーバー）

水嶋 純作（日星高校学校経営アドバイザー）

3 議題

・開会

・運営指導委員長挨拶

・報告・説明：2024年度の本校の取り組みについて

・2025年度実施計画について

・閉会

4 議事録

コーディネーター能勢、教頭吉岡より、2024年度の「舞 Way!」「選択舞鶴」「中間発表・最終報告会」の取り組み状況について説明された。

その後、研究協議は、あえて形式にとらわれず、「ざっくばらんに語る場」として設定され、運営指

導委員と本校教職員の率直な意見交換が行われた。

5 内容

- ・公立高校が定員割れを起こしている状況の中で「選ばれる学校」になるためには、一人ひとりの教員の意識改革と生徒主導の仕組みづくりが必要との指摘があった。
- ・教職員同士の連携強化のためのチームビルディングが必要である。
- ・コーディネーターを採用したことにより地域との連携は一定の成果を得ることができたが、「地域と学校が WIN-WIN になる関係とは何か」を考えなければならない。
- ・上級生の優れたプレゼンに刺激を受ける下級生の姿、プレゼンを「共感の場・わくわくの場」とする文化形成の重要性が強調された。
- ・「やらされ探究」から脱却し、生徒が自分の問いを育てられる環境づくり」が最重要課題として挙げられた。
- ・「新人育成」よりも「リーダー層の育成」に重きを置くべきという意見が出され、教員向けワークショップの継続的実施が提案された。
- ・「楽しさって何だろう？」という問いをテーマに、教育活動を再定義する重要性が議論された。
- ・探究活動や授業の中に、遊び心に近い感覚や、感情が動く原体験をどう盛り込むのかが大切である。
- ・学校内外の多様な他者とつながる経験が、生徒の社会性を育む。「協働」「他者理解」「感情の器を広げる」といった視点が必要であり、それを授業や活動にどう落とし込むかが課題である。

6 所感

「遊ぶ」（モヤモヤを楽しむ）という行為をあえて教育活動に取り入れることで、生徒の感情を動かし主体性を引き出す狙いは十分に意義がある。しかし単に“思いっきり遊ばせる”だけではなく、そこに明確な目的や概念整理を組み込み、探究学習へとつなげなければ意味をなさない。特に“楽しさ”を社会とのつながりと結びつけることが重要だ。生徒の進路や個人的な悩みからスタートしつつも、最終的には社会的視点へ議論を広げ、外部の人材や機関との連携を図ることで、新たなアイデアが生まれやすくなる。

本気で探究に取り組むのであれば、教員自身が常に学び、概念を整理するスキルを高める必要がある。また、「やってみた」で終わらず、活動後にしっかりと振り返りを行い、次の実践へ活かすサイクルを確立しなければ、探究が形骸化してしまう。「楽しさとは何か」「わくわくするとはどういうことか」この問いを教職員自身が深く掘り下げ、教育実践の根幹に据えていく必要がある。

学校風土を改革し、生徒も教員もワクワクできる文化を根付かせるには、受け身の姿勢ではなく、アクセルを踏み続け、生徒の学びと成長を常に意識して進めなければならないと考える。

コンソーシアム会議の記録

第1回コンソーシアム会議

日時・場所

令和6年11月7日（木） 午前10時～正午

日星高校会議室

1 参加者

コンソーシアムメンバー

植本 浩明（一般社団法人 京都府北部地域連携 都市圏振興社）

杉岡 秀紀（福知山公立大学 准教授）

西 忠幸（舞鶴市役所 政策推進部企画政策課）

原田 翔太（KATA lab 副代表）

前田 暁代（舞鶴市教育委員会 学校教育課 主任）

水嶋 純作（みんなあの居場所・彦一郎 代表）

和田 員之（舞鶴商工会議所 青年部）

窪田 好男（京都府立大学 教授）（オンライン）

管理機関

小林 圭児（学校法人聖ヨゼフ学園 理事長）

小林 圭太（学校法人聖ヨゼフ学園 次長）

本校職員

滋野 哲秀（校長）

松崎 真一（教頭）

吉岡 達也（教頭）

能勢 ゆき（コーディネーター）

2 議事録

（1）具体的な探究活動の事例と工夫

- ・探究活動の「出口」となる進路の明確化を図る。そして指定校の確保につなげる。
探究を核に総合型選抜などで一体的な出口作りを目指す。
- ・教科横断型のテーマ（例：「愛とは？」）などを取り入れ、学びの転移を促進する。
- ・高校生の発想は面白いが、形にする際の初動に課題があるため、小さなアクションから確実に実行することが大切との意見があった。
- ・実際の行動により、地域の住民からの肯定的な反応や、時に否定的な反応が得られる経験が、探究活動の本質につながる。

- ・地域資源として舞鶴の観光や新たなお土産開発、マーケティング戦略を高校生に企画してもらい、実践させる取り組みも提案された。
- ・地域全体で探究を展開するため、他高校・中学校を巻き込んだ発表会、さらには地域の公民館などでのフェス形式のイベント（例：お化け屋敷、キッチンカーの活用）など、楽しく実践する場の創出が効果的とされる。

（２）連携と今後の展望

- ・学校、地域、企業、行政が連携し、生徒が主体的に学び、探究活動を実践することで、地域全体の活性化を目指す。
- ・また、外部との交流を促進する仕組み（アンケート調査、プラットフォームの構築など）を整備し、各機関のやりたいことと支援したい内容を一元化する取り組みが求められる。

第2回コンソーシアム会議

日時・場所

令和7年3月26日（水） 午前10時～正午

日星高校会議室

1 参加者

コンソーシアムメンバー

植本 浩明（一般社団法人 京都府北部地域連携 都市圏振興社）

杉岡 秀紀（福知山公立大学 准教授）

西 忠幸（舞鶴市役所 政策推進部企画政策課）

原田 翔太（KATA lab 副代表）

前田 暁代（舞鶴市教育委員会 学校教育課 主任）

水嶋 純作（みんなあの居場所・彦一郎 代表）

和田 員之（舞鶴商工会議所 青年部）

窪田 好男（京都府立大学 教授）（オンライン）

管理機関

小林 圭児（学校法人聖ヨゼフ学園 理事長）

小林 圭太（学校法人聖ヨゼフ学園 次長）

本校職員

滋野 哲秀（校長）

松崎 真一（教頭）

吉岡 達也（教頭）

青葉 謙一（主幹教諭）

小谷 英里（探究主任）

能勢 ゆき（コーディネーター）

2 議事録

（1）具体的な探究活動の事例と工夫

- ・探究活動は高校3年間を通じて継続的に実施されており、3年選択科目である「選択舞鶴」やゼミ型の「舞 Way!」など、特色ある複数のプログラムが運用されている。
- ・ゼミの特性と先生とのマッチングを丁寧に行うことが、生徒・教員双方のモチベーション向上につながる。教員も「ワクワク」する仕掛けが必要。
- ・中間発表や最終発表においては、ファーストピッチなどで活動の全体像を外部に見せる構成を検討しても良い。また、保護者や中学生の参加を深める工夫が進める必要がある。

- ・調べ学習からの脱却が課題として挙がっており、「調べること」自体を深く行わせる指導や、全国レベルの大会（マイプロ全国サミットなど）を目標に据える事例が共有された。
- ・1年目の導入段階では、地域との接点を早期に設けることが学びの方向性を安定させるとされ、テーマ設定段階から地域との接続が重要であるとの意見が出た。
- ・クラス単位で地域課題に取り組みアウトプットを出した中学校の実践も紹介され、早期段階からの協働の有効性が確認された。
- ・歴史的資料（舞鶴市史）や文化資源（赤れんが、ジャズなど）を題材にし、高校生自身が執筆や挿絵制作に取り組むような、創造的かつ地域密着型の探究活動の提案もあった。

（2）連携と今後の展望

- ・他校や中学校、小学校、大学、企業、行政などとのネットワークを意識した連携体制の構築が求められている。
- ・来年度は、年間通した大学生とのオンラインでの壁打ちや、地域大学のゼミとの連携が進められており、探究の質向上と外部刺激の導入が図られている。
- ・地域課題に対する「ビジネス視点」の導入として、舞鶴の特産物（例：舞鶴茶）を使ったビジネスモデル化、企業ブランディングとの接続を試みる構想が共有された。
- ・西市民プラザの活用や、小中学校との交流を通じた地域での学びの場づくりが必要とされた。
- ・地域住民の理解・協力を得るための「地ならし」が不足しており、内輪での連携にとどまらず広範囲な巻き込みが今後の課題とされた。
- ・行政機関への訪問を通じた探究活動もされており、課題意識をもった高校生が社会的実践の中で考える機会を持つことが将来的な人材育成に繋がるという認識が示された。
- ・探究経験者が社会に出たとき、どのような変化や影響を与えるかについて期待が語られた。
- ・教員側も「答えを教える」のではなく、「問いを持たせ、考える機会を与える」姿勢への転換が求められている。

」

2024 年度 総合的な探究の時間「舞 Way！」の実施報告

「問い」から始める

今年度より探究学習を本格的に始めることになった本校においては、1 年生～3 年生まで殆ど同じ内容、同じ速度でカリキュラムを進行してきた。1 学期は主に個人と向き合うためのワークをしてこれから深めていきたい問いをそれぞれが設定するところまでを実施。

夏休み前には、今一度「探究とは何か」「自ら立てた問いとどう向き合っていくのか」を確認すること、そして地域にいる大人たちがどのように「探究」しているのかを知ることを目的に地域の大人を複数人招いて、対話をする交流企画を実施した。

2 学期からは、生徒たちが立てた問いをそれぞれジャンル分けをし、ゼミとして分類。「ゲーム」「音楽」「ファッション」等、全部で9つのゼミに分かれての活動がスタートした。これ以降は、基本的にゼミの担当教員中心にゼミごとの取組が行われた。以下、それぞれの取組について具体的に説明をする。

〇1学期

1. 「IKIGAI」ワーク

慶應義塾大学の前野隆司教授が提唱している『人が「I K I G A I」』を感じる条件をもとに生徒達が現状における自身の生きがいを見出すこと、および再確認をすることを目的としてこのワークを実施した。

なお、このワークには幸福感を感じる条件として4つがあげられており、その4つの条件が重なる部分が「生きがい」となるという。

〈4つの条件〉は以下の通り。

- ①好きなことをやっている。
- ②得意なことをやっている。
- ③社会が必要とすることをやっている。
- ④一定の収入が得られる。



まずは自分の好きなこと探しから開始。ここでは「好きなこと100」リストのワークシートを使用。とにかく思いつく限り、好きなもの・ことのキーワードをあげていく。その後、できる限り出した好きなことを8つに絞る作業を行った。この作業を〈4つの条件〉全てで行った。

この4つの幸せの条件の一つこちらで付け足した項目がある。それは「みんなの幸せな生活に必要なこと」というものである。問いを自己完結させず、社会に目を向けて自分の興味関心とニーズが重なるところも探してみよう、という試みである。

ここまでの作業を通して、最終的に生徒達はそれぞれの「生きがい」を言葉にした。

2. QForcus ワーク

続いて行ったのが QForcus ワーク。これは問いづくりの練習のためのワークである。〈問いづくり〉を通して探究に必要な論理的思考や物事を客観的に見て本質をとらえる力を鍛えることが目的である。様々な画像や写真、文章などをお題として出し、生徒たちはそこから見えてくる「問い」をできる限り多く出していく。

〈問いづくり〉のルール

- ①思いつくままにできるだけたくさんの質問をつくる
- ②途中で質問について話し合ったり、判断したり、答えたりしない
- ③質問はそのままの形で書き留める(省略したり、簡潔にしたりしない)
- ④必ず質問の形(疑問形)にする
- ⑤あらゆる種類の質問を出し合う



実際にこのワークを行ってみると、何の脈絡もない写真を出発点に、生徒達からは多くの問い(質問)が出てきた。問い(質問)が全て出尽くしたら、今度は問いの優先順位を決めていく。出てきた質問を並べて優先順位をつけ、優先順位の高い3つの質問に絞っていく。

このワークは全てグループ活動として行った。「優先順位」をつけて問いを絞る作業を経験することで、拡散から収束に至るプロセスや、問いの本質を見極める練習にもなる。最初は「よくわからない」「難しい」と消極的であった生徒達も作業を進めていく中で要領をつかんできて、最後はどのグループも問いの価値に気づくことができた。

3. 探究学習テーマ探し、学習計画

ここからはいよいよ「マイテーマ」を設定していく。まずはいくつかの質問に答えることを通して、自分の興味の度合を調べていく。その中から、深掘りしたいキーワードをピックアップ、次にそのキーワードに学問分野やSDGsのゴールと掛け合わせて、自分が思いつく限り問いを作る作業を行った。

例えば「推し」というキーワードをテーマにしていた場合、「推し」に「心理学」という学問を掛け合わせて「なぜ人には推しが必要なのか」という問いを立てる、といったように。ここからは、複数出てきた問いに優先順位をつけ、最終的に一つのテーマを選ぶ。テーマを選んだ後は、その問いに対する先行研究や事例をインターネットや文献を使って調べ、分かったことを元に新たな問いを立てていく。この作業を繰り返す中で、自分の本質的な問いを見つけるワークであった。普段からインターネット環境が身近である生徒たちにとって、ちょっとしたことはインターネットですぐ調べられる。ここまでは特に苦労することなく作業を進める生徒たちが大半であったが、そこから「問いを立てる」ということには苦戦している生徒達が多く見られた。

問いが大きすぎて、思考があちこちにいつてしまい、何をどうすればいいのか分からず行き詰ってしまう生徒、また少し調べれば簡単に答えが出てくる「問い」を立てている生徒…といったように。そのような中でもやはり着眼点が鋭い生徒たちは多く、興味深い問いも複数見られた。

4. ゼミ分け、探究の意義を再度捉えなおす～地域の「探究人」たちとの出会い～

まず一つ深めたいマイテーマが出揃った時点でそれらを大きく分野ごとに分けて、ゼミを作った。ゼミは全部で9つ。「教育・社会」「メディア・アート」「ゲーム」「スポーツ」「心理」「食」「ファッ

ション」「動物・生態」「看護」という分類だ。ここで本格的にゼミ活動が始まる前にある企画を実行した。それは地域のキーパーソンたちと生徒達との交流の場を図ることを目的とした。このタイミングでそういった企画を実施したのは、再度「探究」とは何かを生徒それぞれが考えるきっかけを与えたかったこと、また地域の大人たちが「探究」している姿を知り今後自分が探究とどう向き合っていくべきなのかについての知る機会を設定したかったためである。

デザインやアパレル、食品関係等様々な分野から全部で12名の大人に協力していただき、「学生時代に大切にしていたこと」や「現在の仕事の中での面白さや課題、成長」といった体験談をお話していただきながらご自身にとっての「探究とは何か」について生徒達に伝えていただいた。それを受けて生徒達は大人に質問をしたり、また逆に大人側から生徒達へ現在の探究テーマについて質問してもらったりしながら、互いの交流を図った。

大人に多様な観点から色々とアドバイスをもらうことで、生徒達は改めて自分がなぜそのテーマにしたのか考えて言葉にしようとしたり、今のテーマのままでは考えるべきことが広範囲にわたっているため、どのような切り口で深めていくのかをもう少し検討したりする必要があることに気づくきっかけを得たりしていた。



〈実施後のアンケートから〉

- ・これまで探究で何をすればいいのかよく分かっていなかったが、ゲストの話を聞いて自分のやるべきことが見えてきた
- ・地域に相談できる大人がいることが分かりよかった。
- ・これから、自分の取り組みについて話してみたい
- ・面白そうなイベントがたくさん行われていることを知った。今後参加してみたい
- ・探究は難しそうだけど、自分の興味のある事についてとことん考えるものであるということはゲストの方たちを見て分かった。

また地域の方にとってもポジティブな機会になったようだ。「普段関わることの少ない高校生」に対して、自身の取り組みや、価値観を語る上で、自分がこれまで何を大切にし、いつ、どこで、どんなきっかけがあって現在に至るまでの選択をしてきたのかについて振り返るきっかけとなった。日々仕事に追われていると中々自分を顧みる時間を取ることはできないが、こういった機会をもらえたことで自分にとっても良い時間となった」という声をいただいた。

舞鶴市には大学がないため、大部分の若者は高校卒業後には地元を離れる。Uターン率も低く、後継ぎ問題は地域課題の一つである。高校卒業までの間にできる限り、地元の面白い大人、熱い思いを持った大人たちと引き合わせ、地域の魅力を感じることで、地元に対する愛着や誇りが生まれること、また個々人の「豊かさ」の物差しを育てられるような取り組みを今後も行っていきたいと考える。

〇2学期～3学期

5. ゼミ活動

2学期に入ってから、本格的にゼミ活動が始動。各ゼミにつき2～3人の担当教員がつき、ゼミの進行は基本的にその教員に委ねられる形となった。コーディネーターは担当ゼミを持たず、各教室を回りながら生徒達に声をかけ助言をしたり、地域情報を提供したりした。どのような手順で進めていけばよいか分からない生徒も多かったため、流れの説明をしたり、調べ学習のサポートをしたりすることが多かった。

とくにファッションゼミにおいては、担当教員が地域との関係性の中で探究の取組をしたいという思いが強かったため、フィールドワークの調整・実施を複数回行った。アパレル企業に訪問し、販売や流通、広報などについてお話を聞かせていただいたり、繊維工場を訪ねて服作りについてや労働問題について学んだり、刺繍を専門に行っている会社に行き、仕事見学をさせて頂いた上でアパレル業界における本質的な課題の部分や今後の展望についてを知り、互いに意見交流する機会を得た。

今の時代、インターネットを使えば、ある程度のことは調べたり、調べたことをつなぎ合わせてそれなりに形になったものを作ることは可能である。だがそれは、どこからか借りてきた言葉であって、生徒自身の考え及び言葉ではないであろう。実際現場に足を運び、人の思いに触れることで初めて、自分の言葉が生まれてくるのではないだろうか。



ファッションゼミの生徒達を見ていると知らない世界を知ること、自分の考えている範囲を外側から広げてくれる機会がいかに重要なのかを、改めて気づかせてくれた。

また「偶然の出会い」によって取組みが進んでいった事例もある。「探究の授業は誰もが参加できる」というルールを定めたことにより、関心のある地域の人々が探究の授業中にふらっと見学に来てくださるようになった。ある日、舞鶴支援学校の先生が見学に来られたとき、「ゲームの可能性」を探究している生徒達と出会った。生徒たち自身は「ゲームの可能性」をどのような観点から深めていくのか決めかねており、これからどう進めていくか迷っていたのだが、その出会いが今後の方針を決める手立てとなったのだ。

支援学校の先生が「障害があってもなくてもみんなで楽しくゲームに取り組めたら面白いだろうな」と発言されたことがきっかけとなり、「誰もが一緒に楽しめるゲームの形」を模索していく方向性に決ま

った。この後、生徒達は実際に支援学校に足を運び「マリオカートゲーム大会」を実施。大会を通して、簡単な動作であれば支援学校の生徒達もできることを確認し、「電動車椅子のレバーのようなコントローラーがあれば一人でもカートを動かすことが可能なのではないか」という新たな問いを立て、事例を調べたり近所にある舞鶴高専の先生に相談したりした。

結局複数の問題が重なり、コントローラーのプロトタイプ作成は難しいことが判明したのだが、そこで諦めずアナログゲームも範囲に加えて最初のテーマ(問い)である「誰もが一緒に楽しめるゲーム」について考えるようになった。最終的に限られた時間の中で何らかの形ある行動に移せた訳ではなかったが、紆余曲折しながらも何とかできることを考え続ける、という彼らの姿勢が一つの「探究」の形を築いてくれた。これは今後プロジェクト活動を行う生徒達のモデルになったと考える。



○課題

1 年通して探究を進めていく中で、勿論課題も多く出てきた。それらについてまずは簡単に纏めたい。

- ・異なるコースと合同で探究を進めることは時間割的に難しい。進度具合に大きなズレが生じたり、週によって授業があったり、なかったりとコースによってスケジュールが異なるのでとても煩雑になる。また、教員は出欠確認に苦労していた。
- ・1 年生～3 年生まで、ほぼ同じ内容のカリキュラムを同時進行で進めるには多少無理がある。
- ・ゼミごとにやり方が異なり、統一した振り返りシート等を設けていなかったため、生徒達の毎時間の動きやそこで考えたこと、困っていること、気づきなどが視覚化されていなかった。
- ・地域の人たちとの接点が単発のものとなってしまった。継続的な関係性の中で、プロジェクト活動を生み出せたら良かったが、それができなかった。

ここからはそれぞれの課題について具体的に説明する。

①1 年生から3 年生まで合同のカリキュラムについて

本校は普通科(総合/特進)2 コースと看護科、全部で3 つのコースが存在するが、今年度についてはその全てのコースが同じカリキュラム内容で同時にスタートした。総合コースに合わせて探究の時間割が組まれ、基本的には水曜日の午後2 コマ分が探究の授業となるのだが、特進コースや看護科については元々総合コースとは異なった独自のカリキュラムを組んでいるため、必然的にズレが生じてくる。週によって2 コマ参加することもあるれば、どちらか1 コマだけ参加することもある。2 コマとも参加しない週だってある。同じ教室に全く進度の異なる生徒が混じっている状態のため、担当教員はその都度説明

を繰り返さねばならず、負担となっていた。毎度の出欠も大変である。どの時間に誰がいて、誰がいないのかを把握するのも大変であった。

②1年生のゼミ活動について

1年生もゼミ活動からは2・3年生と合同で実施してきたが、個人的には1年生は単独・別カリキュラムで行うべきだと感じた。特に1年生については探究の意義や視野を広げること、体験的な活動、また探究の基本的な進め方(問いの立て方や調査方法等)を学ぶ時間が必要であった。(1年生の積み上げが背景にあることで、2年生で自分なりの問いを考えられるようになるのではないか)。

③振り返りシートについて

「振り返りシート」がなかったことによる動きの見えにくさも問題であったのではないか。特にゼミ活動になってからは個人ないしはグループでそれぞれ取組を行っているため、各授業の中でそれぞれが何をしたのか、どんな問いや気づきが出てきたのか、何に困っているのか、次に何をするのか、といったようなことが把握しづらかった。

そのため担当を持たないコーディネーターにとっては、生徒達がどのような動きをしてきたのか分からず、的確なフィードバックをすることが難しかった。

④地域の人たちとの連携について

地域側には、協力してくださる大人たちが沢山おり、またその人たちもご自身の仕事や地域で開催するイベントなどに「高校生たちに関わってもらいたい」という思いを持たれている。しかし高校生側については、地域に出て何か活動を行うには事前の学びが足りなかった。

地域に出る前に座学の部分や自分と社会の関わりのとらえ方を学び、マイテーマを設定するまでの間にもう少し時間をかけて地域での体験活動をすることで、関心のある分野や挑戦してみたいことが少しずつ見えてくるのではないか。今回については、高校生たちの「地域と繋がってみたらちょっと面白いかも?」といった感情を大切に、熱量の部分育てるような積み上げを丁寧に展開できなかったことが、地域と単発的な繋がりしか持てなかった要因の一つではないだろうか。どうしても高校生側と地域側で熱量の差も生まれやすい。そのことも地域側に理解をしてもらうための根回し(説明)が必要であると感じる。

○対策

ここでは上記の課題に対して、来年度以降の対策について述べる。

①コース別のカリキュラム

コース別のカリキュラムを検討すべきだろう。ただ異なるコースの生徒らが交流することで生まれる良い影響も勿論ある。例えば中間報告会や最終報告会、ゼミ活動の場合は異なるゼミ同士での意見交流の場など合同で活動する機会も設けると良い。

②探究の基礎的な学びを習得

1年生については、他学年とは一緒にはせず、探究の基礎的な学びを習得すること、多角的な視点で物事を捉えられるような力を育むこと、グループ活動や体験的な活動を通して自分と他者、社会との距離感を把握し、2年生に向けて自分なりのマイテーマをじっくり1年かけて考えていく期間としたい。やはり基礎がない状態でテーマを設定し、自由に探究せよ、では難しいということが今回の生徒たちの活動から見えてきた。

③活動の振り返り

活動の振り返りについては、統一した振り返りシートを作成し、毎時間ごとの振り返りをさせることを習慣化する必要がある。振り返りシートは、担当教員を始めとして、他の教員やコーディネーターも閲覧できるような形にしておく。それがあることで、毎時間生徒達が何を考え、何をしてきたのかがある程度把握できるので、伴走者はサポートしやすくなる。また担当者が伴走に困った際、他の教員やコーディネーターが情報を持っている場合、担当者以外も相談にのれる。更には振り返りがあることで、足りていない部分をフィードバックできる。生徒の動きの見える化は積極的に行っていくべきだろう。

④地域連携

まずは地域側に対して、学校の取組について理解していただくためのアプローチをせねばならない。「探究学習とは何であるか」「探究を通して学校はどういう生徒を育てたいと考えているのか」「それを実現させるために地域側にどのような協力をお願いしたいのか」ということなどについて丁寧に説明していく必要がある。地域側のニーズは場合によっては「若者の労働力ややる気の搾取」に繋がることもあるため、あくまで学生の学びや原体験、成長を目的とした接続であることを理解していただけるよう、コーディネーターは動きたい。

一方で、地域の方々にもメリットがなければ地域連携事業の継続は難しいだろう。例えば地域の方と生徒をつなぐ前の段階で、どんな生徒であるのか、地域の方に事前に説明をしたり、事前学習として生徒達には地域側の情報を調べた上で、地域の人へ聞いてみたいことを挙げてもらい、それを事前に地域の方へ共有するといったような細やかな配慮は大切だ。

また中間報告会や最終報告会等、実際関わって頂いた生徒達の取組を見ていただくことや、定期的に生徒達の取組や成長に関して報告したりするといった丁寧なやり取りを心掛けたい。また講演会や交流会等、単発の関わりで終わらせるのではなく、「フィールドワーク→アウトプット→フィードバック」といったような一連の流れの中で複数回、高校生と地域の人が接点を持つポイントを作りたい。

⑤生徒のテーマの深め方と教員の伴走の仕方について

教員が生徒の「問い」の概念整理を行い、それを社会と繋げることが重要である。

そのために「楽しさってなんだろう」を教員で共有すること。探究とは生徒の「楽しい」を社会と結びつけることが大切である。その中で多様性を尊重する。多様な他者がいることに気づく。人間は協働することで新しい知が生まれることを教員がまず知り、それを生徒に還元できる仕組みが必要である。そのためにも私たちコーディネートする側が、探究で重要なことを考え振り返りも含めて行う必要性がある。

○長期的な目で見たい今後の展望(コーディネーターの視点から)

最終的な理想の学校の姿として思い描いているのは「学校が世代を超えた人々の拠り所―福祉のプラットフォーム」としての役割を果たせるような場となることだ。本校がある同じ敷地内に幼稚園があること、そして看護科を有していること。元々昔から、高校生が幼稚園に訪れ実習をしたり、季節に合わせた演奏会を行ったりと交流があった。また看護科実習の中でお年寄りと関わることも多くある。こういった昔から築いてきた地域との関係性を引き続き大切にしながら、今後は「探究」という切り口から新たな縁を作り出し、広げていきたいと考えている。

私は今年度4月から初めて舞鶴に来て、知り合いもいない状態での生活がスタートしたが、知れば知るほどこの街は面白い。『様々な分野で「探究をしながら楽しんで」生きている大人たちがとにかく多いのだ。だがこんなにも面白い人たちがたくさんいるのに高校生たちは、その存在の殆どを知らないままに高校を卒業してしまい、地元を離れる者も多い。何てもったいないことだろう』と思う。

まずは自分の生きている街のこと、その街を構成する人々のことを知るためのきっかけづくりから取り組みたい。もしかするとそこから面白さを見出し、探究テーマが生まれるかもしれない。小さなところから始まった取り組みが結果的に多くの人を巻き込んでいる。高校生たちの探究に巻き込まれて、様々な年代の人々が学校に出入りし、集うようになる。これまでの関わりは、世代ごとの分断があった。だがこれからは、その分断を取っ払い、多様な人々が入り混じるような関わりが、ここ日星高校から生まれたら、そしてそれが舞鶴という地域に「当たり前のこと」として根付いていったらいいな、と考える。

総合的な探究の時間「舞 Way！」中間報告会/最終報告会実施報告

【2年生中間報告会及び3年生卒論発表会】

中間報告会&卒論発表会は2024年11月20日に実施。普段はゼミごとに教室を分けて活動をしているが、この日は他のゼミの生徒同士が交流できるよう、各発表教室につき2～3のゼミが混ざるように構成した。大変だったのは、最初に予想していたよりもテーマ数がかなり多くあった点だ。グループが少なく、個人活動を選択した生徒が多かったため、全部で120余りのテーマができた。今回1年生の発表はなく、2・3年生の発表を見学するという形式で行った。ゼミとしては9月ごろから動き出したため、そこから2カ月程動いてみての現状と気づき、今後の展望等を発表した。



報告会は事前申し込み制で誰でも参加可能という形にしていたので、京都市内や奈良県、兵庫県など、様々な地域から教育関係者を中心に足を運んでくださった。

実際に発表を見ていただき、出てきたコメントの一部を紹介する。

- ・自分の学習に活かすために映像学習の探究をしていて面白いと思った。
- ・歴史、言語、クリエイティブの3軸に絞ったのは分かりやすかったが、発表の冒頭でその説明があるともっとわかりやすかった実際に自分でもこの方法で勉強してみてもの考察があると良い。
- ・なぜ人は文明を作るのか。面白い着眼点だと思った。文明をつくるのか、つくられているのか難しいところ。人間が柔軟な生き物で生きるための水、生きられる環境であればどこでも生きてきたということが分かった。もし発展させるのであれば、今後どんな文明になっていくのかの予想(他の国も比べながら)、どんな時代になってほしいのかの思いなども整理して発表できると面白いかもしれない。
- ・定量的なデータと比較があればより説得力が増す。
- ・探究テーマにした背景がとても分かりやすかった。原稿の棒読みではなく、自分の言葉で話せていたのがよかった。解決策の提案について、それを実際に自分でもやってみてもの考察があるとなお良い。
- ・素晴らしい発表だった。自分が本当に興味のあることをテーマにしたことが伝わった。
- ・設定した背景、現状分析、課題の解決案までしっかり考えられている。
- ・保護犬0を目指すことは実際問題難しい。どのくらいの人が、どんな協力をすれば何年くらいで0になるのかのシミュレーションがあると、より説得力が増す。
- ・自分が調べているテーマに関しての過去の研究、参考文献に触れてみる必要がある。

上記のコメントを見ていてお気づきかと思うが、まず調査の段階で先行研究が圧倒的に足りていないことが分かる。調査が行き届いていないので、自分の考えに対して説得力に欠けるという点が指摘されていた。来年度では具体的な数値や比較分析、先行事例等もう少し丁寧に調べる必要があることを説き、調査方法を学ぶところから実施するようなカリキュラム編成にしたい。

次にアクション(実践・実証/検証・実験)が不十分であるという点。調べたことから、解決案の提案までする生徒は多いが、実証していないので今一つ説得力に欠ける。実際にやってみてどうだったかの結果、

その上で生まれた新たな疑問や課題について精査し、新たな実践に移す。その繰り返しが探究では必要である。多くの活動が行動までに結びつかなかったのは反省すべき点である。

だが、必ずしもアクションだけをすれば良いという話ではない。先ほどから述べている通り、調べ学習とアクションをバランスよく行い、繰り返すといった作業が必要だ。その過程の中で問いや仮説を研ぎすませていくことが重要である。

例えば、「舞鶴の特産品である万願寺唐辛子を使ってスイーツを開発する」というチームがあったのだが、この発表を聞いた方からのコメントとして以下のようなものがあった。

ケーキやクッキーを使ったアウトプットは良かったと思うが、アクションをする前に

- ・そもそも万願寺とは？(舞鶴の特産品であることや特産品となった歴史など)
- ・どうして万願寺を選んだのか
- ・誰の何のためにそれを作っているのか(ターゲットや目的)といった部分が見えてこなかった。そういった部分は自分たちの中できちんと整理しておくべき

一つの探究の型(勿論色々な方法があるので全て網羅するのは難しいが)として、まずは全体でフォーマットを揃えるところから始めてもいいのかもしれない。

最後に中間報告及び卒業論文発表会全体を見ての感想で、面白い意見が上がっていたのでそれを紹介してこの章を締めたい。

今回2年生の中間報告会と3年生の最終卒論発表会(最終報告会)を同時に開催したが、それを見に来てくださった人々の多くが「2・3年生の発表を比較したときに全体として3年生の方が質の高い発表をしていたのが印象的であった」と回答していたのが印象的であった。

毎授業、全学年が混じって各教室で作業を行っているため、探究の授業の中でこれほどの差が出るとは考えられない。やはりこれまでの蓄積量(英語や情報の授業でプレゼンも行われている)の違いか。その意見は個人的に面白かった。

【1・2年生最終報告会】

2025年1月29日に1・2年生の最終報告会が実施された。1年生は公式の場では今回が初めての発表の機会となる。今回はゼミ混合の形にはせず、基本的に同じゼミが一つの教室で発表することとなった。最終のアウトプットの評価に関わった担当教員が行いやすいという意見が出たためだ。発表時間は1人当たり6分与えられており、基本的には5分発表・質疑1分という風に割り当てられていたが、必ずしもそれ通りに行く必要はなく、発表が早く終わればその分質疑に使うよう決められた。

全部を見たわけではないが、全体の発表を見ていて感じたのは、基本的に中間報告会で感じたことと一緒だ。一つはやはり自分の考えに対する根拠が薄いこと。アンケート調査を行っている生徒達は多くいたが、その大部分は校内調査にとどまり、アンケートの回答数も母体が小さい。例えば先行研究とそれとを比較して「私たちの学校の場合はこうです」と言うはまだ説得力は増すのだが、そこまで分析できている発表は少なかった。そしてもう一つは、圧倒的にアクションが少ないということ。

仮説や課題に対して解決策の提案までは出せても、それを自分で実証している生徒はとても少なかった。

た。それ故、どうしても真実性に欠けてしまう。実際に自分で試してみてどうだったのか、それが上手くいったのか、あるいはいかなかったのか、やってみて新たに生まれた疑問や仮説はなかったか、という風に自分の手足を動かして初めて「自分の言葉」で自らのテーマを語れるようになるのではないか。

根本的なところで言うと、参考文献が示されていないが故にどこまでが自分の考えでどこからが調べたことなのかが曖昧なものもあった。これは単純に指導が行き届いていないということなので、来年度は統一した指導ができるよう発表のフォーマットやルールについてマニュアル化したいところである。

ここまでどうしても目についてしまった惜しい点を述べてきたが、勿論良かったところも多くある。まず全体として高校生たちの着眼点がとても面白いということ。それを起点に大部分の生徒が個人活動を選択したので、全部で 120 近いテーマが出てきた。これだけの数の発表ができたこと、それは初めての試みとして褒めても良い点ではないだろうか。報告会が終わった後は大きな達成感に包まれた。

また教室によっては発表に対する質問が生徒からたくさん出てきて、それに対して一生懸命答えている姿であったり、中には本当に好きなこと・関心のあることをテーマにしたのだな、とこちらまで伝わってくるような熱量をもった発表を聞かせてくれる生徒もいた。

外部から発表を聞きに来てくださった方から、嬉しいコメントがあったので紹介したい。

本日見させていただいた発表の中でとくに〇〇さんの発表がとても良いと感じました。課題設定の適切さ、仮説、収集した情報の根拠ある分析と素晴らしい発表でした。ぜひ〇〇さんの探究の進め方をみなさんに示してあげていただきたいと思います。発表からも〇〇さんが本を愛しているということが非常にわかる発表でした。やはり、探究で大切なのは自身が本当に好きなこと、本当に興味のあること、本当に疑問に思っていることから問いをつくることだと改めて〇〇さんの発表から学ばせていただきました。

本校の探究はまだまだ開発途中。教員も生徒もどこを目指していけば良いのか模索しながらの進行のため、行き詰まり、先の見えない旅路から志半ばで降りたい、と考える者も多くいたのが事実だろう。それでもこうして一つでも二つでも光る探究が出てくると、やっぱり探究は捨てたものではない、何とか生徒たちの得意や好きを伸ばし、知らない世界を見せてあげたい、と思うのだ。今はまだ学校全体として(教員も生徒も)「探究をやる意味があるのか?」と疑心暗鬼になっている人が大半であるので、来年度はそのパーセンテージを少しでも減らし、何か 1 つ生徒から「探究って面白い!」と言わしめる取組を生むことが目標である。

生徒の「舞 Way！」ふりかえり より

探究学習を通して、いろいろなことに疑問を持つことの大切さがわかりました。自分の探究テーマに沿って調べたことをただまとめるだけではなく、調べたことと一つのことに対して疑問を持ち、その疑問の答えを出すために自ら動くことが重要だと思いました。探究をしていく中で調べたことを相手にわかりやすくまとめることが難しかったです。自分が主張したい内容を全部伝えようとするスライドが見づらくなってしまったので、伝えたい内容をいかにシンプルに、理解しやすいようにまとめるかが大事だと感じました。

発表当日は、自分のタブレットばかり観て、全く聴衆の方を見ることができなかったのが反省点です。自分の発表内容と似た発表がなかったからこそ、もっと積極的な姿勢で発表したほうが聞き手の記憶に残ったので、発表の仕方（目線、声の大きさ、話し方など）を工夫することも大切だと感じました。

他の人の発表を見て、新しい知識を吸収でき、自分の視野を広げることができました。来年の探究にもいかせたらいいと思いました。今回探究で読書や図書館について調べて、自分の興味のあることを深掘りできたので、自分の将来にもつながれたらいいなと思いました。

私は将来図書館司書になりたいと思っていて、今回の探究で図書館へのさらなる興味が湧いたので、実際に図書館に行って違う観点から探究してみたらもっと好きなことに対して深掘りできると思いました。

僕は、ゲームゼミで探究活動をしていました。1学期の頃は、何をすれば良いのかわからなかったのと、僕自身がこういう活動が苦手で、全く進められないまま1学期が終わってしまいました。ですが、2学期の半ばに決めないといけない時が来てしまい、そのときに「ゲームの可能性」について探究していたKさんとHさんのチームに入れてもらう」ことにして、探究活動が進められるようになりました。

2人の探究活動を聞いていて、文化祭でスマブラ大会を開いて成功したその次は、支援学校のゲーム大会を通じ交流したいということだったので、僕の初めての活動は「支援学校の生徒たちとマリオカートを通じて交流を深める」というものでした。

まずは、支援学校の校長先生に電話をして、企画を伝えてできるかどうかの許可をいただいて、予定を組んでいただき、なんとか交流できるということになりました。この活動は、日星の先生や支援学校の先生方、交流してくださった生徒の方々の様々な人が支えてくださり、協力していただけてきた活動だったので、協力してくださった全ての皆様に感謝の気持ちでいっぱいになりました。

3学期には発表があったのですが、体調不良で休んでしまい、そのときには発表できませんでしたが、ちゃんと後の授業で発表することができました。来年も、同じ内容で探究をさらに深めたいと考えています。

3年生「選択舞鶴」実施報告書(コーディネーターの思い)

本授業は3年生の選択科目として設定され、舞鶴という地域の魅力を再発見するとともに、地域で起こる社会課題に目を向けその解決策を考え、実際に行動に移して結果を検証するという一連の流れで進められる。

【自分が取り組みたい社会課題解決プロジェクトを選ぶ】

まず、授業の選択者全員で「SDGs カードゲーム」を実施した。

プレイヤーは与えられた役割の立場から、個人プロジェクトの達成と、ゲーム終了後に経済・環境・社会の3項目すべてが基準値以上を満たす理想的な地域の状況を実現することを目標に、他者と協力しながら進める。この架空の街を舞台としたゲームを通して、生徒たちは3つのバロメーターのバランスを保ちながらプロジェクトを進める難しさを実感した。

私利私欲を優先すれば社会状況は悪化し、逆に地域社会の理想を追求しすぎれば個人プロジェクトの達成が難しくなり、自己犠牲が求められる。そのため、他者との協力、自己実現と他者への配慮のバランス、そして長期的な視点で社会の変遷を捉える必要性を学んだ。

ゲーム終了後、各自が実際に舞鶴地域で取り組みたいプロジェクトを、SDGs カードゲームのプロジェクトカードから一つ選んだ。

【個人・グループでのプロジェクトの実行】

SDGs カードゲーム終了後、各自が選んだプロジェクトカードをもとに、個人およびグループでの取り組みが始動した。

個人活動としては「子育て世代と高校生の交流を図るための仕掛けづくりにチャレンジ」「公民館の利用法／多世代交流の創出」「舞鶴茶の魅力を伝えたい」という3つのプロジェクトが、グループ活動としては「海ごみ問題について考えよう」というプロジェクトが立ち上がった。

まずは各自のアイデア出しから始め、地域の課題に触れつつ、高校生として何ができるかを考えアイデアをまとめた。

たとえば「舞鶴茶の魅力を伝えたい」と考えた生徒は、「舞鶴茶を使ったお土産用スイーツを開発し、認知度が上がれば『舞鶴＝お茶』という印象が強まるのではないか」という仮説を立てた。

また、「公民館で多世代間交流を生み出したい」と考えた高校生は、ゲーム好きであったことから、何かゲームを活用したイベントを企画することを思いつき、最終的には「アナログゲーム大会を開催する」というアイデアが生まれた。

アナログゲームは、上の世代に懐かしさを感じさせ、若い世代には新たな体験を提供できると期待された。

以下、私が伴走した3つの個人プロジェクトについて具体的に説明する。

【舞鶴茶の魅力を伝えたい】

彼は抹茶が大好きであったが、周囲の友人の中でお茶を好む人は少なかった。

舞鶴では賞をとるほど美味しいお茶が栽培されているにもかかわらず、京都のお茶＝宇治茶という印象が強く、地元の人々でさえ舞鶴茶の存在を十分に認識していなかった。

そこで彼は、観光用のお土産として舞鶴茶を使用したスイーツを開発すれば、舞鶴のお茶の魅力をより多くの人に伝えられるのではないかと考えた。

最初は、彼がイメージするお茶スイーツのラフスケッチを描くことから始まった。

学校が位置する西舞鶴エリアのシンボルである五老ヶ岳を模したケーキを作るというアイデアが出た。彼は何層にも分かれた緑色のケーキをデザインした。

スイーツの具体化にあたり、専門家の助言を求めるため、舞鶴茶の販売や抹茶を使ったスイーツドリンク等を提供する「るる亭」さんを相談役に選んだ。

るる亭さんは快く相談役を引き受け、彼の拙い説明にも真摯に耳を傾けた。

特に、彼が地元の特産品である舞鶴茶に関心を示したことを喜んでくださり、「ぜひその思いを多くの人に届けてほしい」との声をいただいた。一方で、スイーツの材料やお茶の種類については助言を得られたものの、コラボ開発については現段階では難しいとの回答もあった。

その後、彼から相談の結果を聞いた私たちは、再度コンセプトの見直しに取り組んだ。

「舞鶴茶を好きになったきっかけは何か」「舞鶴茶の魅力を最も伝えたい相手は誰か」「スイーツ以外の伝え方はないか」「そもそも、誰が舞鶴茶の魅力を十分に理解しているのか」など、多角的な視点から議論した結果、彼はまずは自ら舞鶴茶について徹底的に調べることが必要であると気づいた。その後、再度るる亭さんに相談を持ち掛けると、「お茶のことなら任せてください！」との快い返答を受け、レクチャーを受けることになった。

るる亭さんのもとでは、豊富な茶葉と丁寧なスライド資料が用意され、忙しい中 1 人の高校生のために時間を割いてくださる姿勢に、彼も大いに感銘を受けた。

舞鶴茶の歴史、他地域のお茶との比較、種類、製造過程、現状や課題、展望など、非常に丁寧な説明を受け、情報量の多さに戸惑いながらも熱心に質問する姿に、指導者としても感動した。

最終的に彼は「学んだ舞鶴茶の魅力や面白さを、自分自身で語る」という方法を選んだ。

最初に思い描いていた商品開発は困難であったが、自分の話に興味を持ってくれた後輩に、その意志を引き継いでほしいと語っていた。



【公民館で多世代交流を～アナログゲーム大会の企画～】

普段、高校生は公民館をあまり利用しない。平日は学校があるため利用率が低く、土日は部活動等で忙しい。

また、公民館では親子向けやシニア向けのイベントは開催されるが、高校生の利用は限定的である。

その点に着目したある高校生は、特に 80～90 年代のアナログゲームに詳しく、昔のゲームを用いれば上の世代は懐かしさを感じ、若い世代には新たな体験を提供できるのではないかと考えた。

この仮説をもとに、公共施設でのゲーム大会を企画することになった。

しかし、彼にとってはイベント企画・主催の経験がなく、自ら物事を動かすのは得意ではなかった。

頭ではさまざまなアイデアがあったものの、実行に移すまでには時間がかかった。

とにかく実施日を決定し、逆算して準備を進めるよう促すも、しばらくは動きが鈍かった。

そこで、最初の一步として、アナログゲーム大会の企画に携わっている地域の方と連絡を取り、相談会を兼ねた出会いを持った。

初対面の大人と話すことに緊張していた彼であったが、地域の方からはアイデアが面白いとの評価と、企画の流れや当日の対応方法など具体的な助言を受け、最後には「小さくてもまず企画を実施してみよう」という決意を固めた。

その後、より多くの年代の意見を取り入れるため、アイデア会議を開催。

この会議自体を、彼が本来目指していた「多世代交流の場」として活用し、参加者の意見を反映した結果、当初のアナログゲームから「マイクラフトを使った企画」という方向にまとめることができた。

最終的には、就職試験等の影響で企画の実行は見送られたが、イベント企画に必要な準備の大変さや、多世代に響く企画の難しさ、そして他者と意見を交わすことで新たな発想が生まれることを学ぶ貴重な体験となった。



【中高生と親子が関わるきっかけ作り】

彼女は幼い子どもと関わるのが好きであったが、コロナ禍以降、幼稚園実習がなくなったため子どもと接する機会が減り、寂しさを感じていた。

そんな中、本授業でマイプロジェクトを実施する機会があり、SDGs カードゲームを契機に「親子支援」をテーマに取り組むことを決意した。

初めは、高校生とその両親との現状を調査した。

たとえば、年の離れた弟や妹がいる場合、または料理が趣味の場合は、家事や子どもの面倒を親に代わって行うケースが見られたが、全体としては、子どもの頃に比べコミュニケーションの機会が大幅に減少していることが判明した。

また、機会があれば子どもと関わりたいと考える同世代も多いことが分かった。

そこで、親子向けイベントを開催し、親子と高校生が交流する場を設けることで、高校生が「子育て」の大変さを知るとともに、親も一緒に楽しめる内容を企画した。

当初、彼女は参加者に家事の大変さを体験させる内容を検討したが、家事に限定すると面白みに欠けるとの悩みがあった。

舞鶴市が実施している親子向けイベントや他地域の事例を参考に、「体を動かす」ゲームなど、子どもが喜び、大人もリラックスできるプログラムを模索。

また、実施場所としては、広さがあり調理室が完備された学校を利用することで、費用面の問題も解決した。

学校の許可が下りると、滞っていた作業が一気に動き出した。

さらに、彼女は中学生にも参加してもらい、中高の連携を図り、高校で行われている取り組みを中学生に知ってもらい、進路選択の一助にしてもらおう狙いもあった。

近所の中学校に働きかけた結果、「子どもからお年寄りまで食べられるスイーツの開発」に取り組むグループを紹介してもらい、高校生と中学生が連携する形となった。

彼女は中学生に対し、これまでの経緯や企画の趣旨、現状の検討事項および協力を求める内容を説明したところ、中学生たちは快くサポート役を引き受け、これを契機に中高生合同チームが誕生。

イベント当日までに役割分担や進捗状況の確認のため、オンライン会議を2～3回実施した。

また、広報活動として、同一敷地内の幼稚園に出向き、保育士や保護者への説明と案内を依頼。

その際、幼稚園児が楽しめる遊びやキャラクターの情報も収集し、企画の参考とした。

多くの人々の協力により、イベント当日を迎えることができた。

当日は、初めて直接中学生とも顔を合わせ、高校生側のボランティアも募り、中高合同で約10名が参加。中学生との話し合いの結果、イベントは二部制で進行し、第一部はケーキのデコレーション、第二部は宝探しゲームとオリジナルクリスマスツリーの作成というプログラムが実施された。

参加者はそれぞれ役割を担い、準備に取り掛かった。



事前の目標数には届かなかったものの、来場した親子に十分な喜びと交流の機会を提供できた。



特に、手作業を中心としたプログラムにより、参加者同士で作品を褒め合い、意見を交換する光景が見られ、小さな子どもの作業は中高生がサポートするなど、双方にとって有意義な交流の場となった。



最終的なアンケートでは、「とても良い企画だった。今後も季節ごとにこのような親子企画をしてほしい」という回答を得た。



【1 年を振り返って】

各生徒のマイプロジェクトは、質的にはまだ改善の余地があり、取り組みが停滞する場面も見受けられた。しかし、私は生徒自身が考えたことをできるだけ自らの形で表現するためのサポートに徹することを心がけた。

たとえ小さな経験でも、生徒にとっては大きな挑戦であり、進捗確認や「今何をすべきか」「どこから調べるか」「誰に協力を求めるか」といった対話を重ねる中で、

「こうすれば良いのではないか」「次にこう動いてみよう」という自発的な意志が見えてくるようになったことは、成長の証と言える。

最後の発表会では、「この授業でこんなにも動くことになるとは想像していなかったが、地域に出てさまざまな人と出会い、実際に行動することで多くの気づきと学びがあった」と直接聞いたことが大変嬉しかった。

今後の目標は、普通科改革により2年後に開講する新しいコースの基盤を構築することである。

今年度は、生徒の様子を見ながら柔軟に対応してきたが、来年度はより体系的なカリキュラムの中で、基本的な調査方法や多角的な視点の育成にも力を入れる必要がある。

「自分が今ここにいる」という実感を伴ったプロジェクトを各自が立ち上げられるよう、地域の人々の協力および理解を得るとともに、学校側もオープンな姿勢で地域に向き合い、

「地域で教育をするとはどういうことか」をみんなで考え続けることが重要である。

時間はかかるかもしれないが、若者たちが豊かで健やかに生きるための選択肢を広げるため、私たちはこれからも伴走していく所存である。

2024年「舞Way!」(総合的な探究の時間)

1年生					
		総合		特進	看護
月	日	5限	6限	6限	5限 6限
4	10	入学式			
	17	オリエンテーション(探究学習)	IKIGAI	オリエンテーション(探究学習)	オリエンテーション(探究学習) IKIGAI
	24	問いづくり演習		問いづくり演習	授業 問いづくり演習
5	1	みことばの祭儀			
	8	問いづくり演習		問いづくり演習	問いづくり演習
	15	探究活動ルール説明	探究活動計画の作成	探究活動ルール説明	授業 探究活動ルール説明
	22	ミニ探究(杉岡先生公演(プレゼン))			
	29	ミニ探究	ジェンダー講演会	ジェンダー講演会	授業 ジェンダー講演会
6	5	体育祭練習			
	12	ミニ探究		ミニ探究	ミニ探究
	19	ミニ探究		ミニ探究	ミニ探究
	26	ミニ探究(発表)		ミニ探究	ミニ探究(発表)
7	9	ガチ探究	ガチ探究	授業	ガチ探究 ガチ探究
	10	ガチ探究	ガチ探究	授業	ガチ探究 ガチ探究
9	4	ガチ探究	ガチ探究	ガチ探究	授業 ガチ探究
	11	学校別進路ガイダンス就職対策講座		ガチ探究	ピア活動
	18	ガチ探究	ガチ探究	ガチ探究	授業 ガチ探究
	25	文化祭準備		文化祭準備	文化祭準備
10	2	ガチ探究	ガチ探究	ガチ探究	授業 ガチ探究
	9	ガチ探究	ガチ探究	ガチ探究	授業 ガチ探究
	16	中間考査		中間考査	中間考査
	23	校外学習1日		校外学習1日	
	30	中間報告資料作成	中間報告資料作成	中間報告資料作成	授業 中間報告資料作成
11	6	卒業論文発表会		中間報告資料作成	授業 授業
	13	中間報告資料作成	中間報告リハーサル	中間報告リハーサル	中間報告資料作成 中間報告リハーサル
	20	探究中間報告		探究中間報告	探究中間報告
	27	ガチ探究	ガチ探究	ガチ探究	ガチ探究 ガチ探究
12	4	期末テスト			
	10	ガチ探究	ガチ探究	ガチ探究	ガチ探究 ガチ探究
1	8	始業式		始業式	始業式
	15	ガチ探究	ガチ探究	ガチ探究	ガチ探究 ガチ探究
	22	探究報告会資料作成	探究報告会資料作成	探究報告資料作成	ピア活動
	29	探究発表会		探究報告会	探究発表会
2	5	雪のため休校			
	12	家庭学習日		家庭学習日	家庭学習日
	19	探究発表会フィードバック		フィードバック	実習まとめ 実習まとめ
	26	まとめ		まとめ	

2024年「舞Way!」(総合的な探究の時間)

2年生					
		総合		看護	
月	日	5限	6限	5限	6限
4	10	入学式			
	17	IKIGAI	オリエンテーション(探究学習)	IKIGAI	オリエンテーション(探究学習)
	24	問いづくり演習			問いづくり演習
5	1	みことばの祭儀		みことばの祭儀	
	8	学校別進路ガイダンス就職対策講座		問いづくり演習	
	15	探究活動ルール説明	探究活動計画の作成	授業	
	22	ガチ探準備 ゼミ説明	ガチ探究ゼミオリエンテーション	ミニ探究(杉岡先生公演(プレゼン))	
	29	ガチ探究	ジェンダー講演会		ジェンダー講演会
6	5	体育祭練習			
	12	ガチ探究	ガチ探究	授業	ガチ探究
	19	ガチ探究	ガチ探究	授業	授業
	26	ガチ探究	校内オープンキャンパス②就職対策講座	授業	ガチ探究
7	9	ガチ探究	ガチ探究	ガチ探究	ガチ探究
	10	ガチ探究	ガチ探究	ガチ探究	ガチ探究
9	4	ガチ探究	ガチ探究	ガチ探究	ガチ探究
	11	学校別進路ガイダンス就職対策講座		ピア活動	
	18	ガチ探究	ガチ探究	ガチ探究	ガチ探究
	25	文化祭準備		文化祭準備	
10	2	ガチ探究	ガチ探究	授業	ガチ探究
	9	ガチ探究	ガチ探究	授業	ガチ探究
	16	中間考査		中間考査	
	23	模擬授業・体験授業		授業	ガチ探究
	30	中間報告資料作成	中間報告資料作成	授業	中間報告資料作成
11	6	卒業論文発表会		実習	実習
	13	中間報告資料作成	中間報告リハーサル	授業	中間報告リハーサル
	20	探究中間報告		探究中間報告会	
	27	ガチ探究	ガチ探究	授業	ガチ探究
12	4	期末テスト			
	10	ガチ探究	ガチ探究	ガチ探究	ガチ探究
1	8	始業式		始業式	
	15	ガチ探究	ガチ探究	ガチ探究	ガチ探究
	22	探究報告会資料作成	探究報告会資料作成	ピア活動	
	29	探究発表会		授業	探究
2	5	雪のため休校			
	12	家庭学習日		家庭学習日	
	19	学年末考査		授業	授業
	26	学年末考査			

2024年「舞Way!」(総合的な探究の時間)

3年生					
		総合		看護	
月	日	5限	6限	5限	6限
4	10	入学式			
	17	IKIGAI	オリエンテーション(探究学習)	IKIGAI	オリエンテーション(探究学習)
	24	舞鶴市雇用促進課 舞鶴の話			問いづくり演習
5	1	みことばの祭儀		みことばの祭儀	
	8	学校別進路ガイダンスと就職対策講座		問いづくり演習	
	15	問づくり演習	問づくり演習	授業	問づくり演習
	22	探究活動ルール説明	探究活動計画の作成	ミニ探究(杉岡先生公演(プレゼン))	
	29	ガチ探究	ガチ探究	授業	ジェンダー講演会
6	5	体育祭練習			
	12	面接練習		ミニ探究	
	19	求人票(		授業	授業
	26	ガチ探究	面接講座	授業	ガチ探究
7	9	ガチ探究	ガチ探究	ガチ探究	ガチ探究
	10	ガチ探究	ガチ探究	ガチ探究	ガチ探究
9	4	面接練習(TAP)IV		授業	ガチ探究
	11	ガチ探	ガチ探	ピア活動	
	18	ガチ探		授業	ガチ探究
	25	文化祭準備		文化祭準備	
10	2	ガチ探		授業	ガチ探究
	9	卒業論文作成		授業	ガチ探究
	16	中間考査		中間考査	
	23	ガチ探		授業	ガチ探究
	30	ガチ探		授業	報告資料作成
11	6	卒論発表スライド作り		授業	報告資料作成
	13	卒論発表スライド作り		授業	報告リハーサル
	20	卒業探究発表会		卒業探究発表会	
	27	卒論発表フィードバック		授業	授業

MUFG(三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング)

高校魅力化評価システム調査結果

1回目 2024 年 9 月実施

2回目 2025 年 2 月(3 年生) 3 月(1,2 年生)

10Pt 以上プラスの項目

大項目	2回目	1回目	1回目との差
【社会性に関わる学習活動】	44.7%	31.0%	13.7pt
【探究性に関わる行動】	58.6%	48.2%	10.4pt

小項目

日本や世界の課題の解決方法について考える	44.7%	29.1%	15.6pt
学校外のいろいろな人に話を聞きに行く	36.7%	21.5%	15.2pt
公式やきまりを習う時、その根拠を理解するように、自分で考えたり調べたりした	59.7%	44.9%	14.8pt
生徒同士で活動、学習の振り返りを行う	58.0%	45.3%	12.7pt
自分の考えを文章や図表にまとめる	51.3%	38.9%	12.4pt
私に関わることで、変えてほしい社会状況が少し変えられるかもしれない	46.9%	34.8%	12.1pt
地域の課題の解決方法について考える	44.7%	32.8%	11.9pt
授業で興味・関心を持った内容について、自主的に調べ物を行った	56.2%	44.5%	11.7pt
自分の暮らす地域を、外からの視点で考える機会がある	64.6%	53.0%	11.6pt
住んでいる地域の文化や暮らしの価値ある部分を、自らの手で未来に伝えていきたい	52.2%	41.3%	10.9pt
地域や社会で起こっている問題やできごとに関心がある	59.7%	49.0%	10.7pt

1 回目 2024 年度 9 月実施分と 2025 年 2 月 3 月実施したものを比較した。

前回調査と比べて 10 ポイント以上伸びている項目がいくつか見られ、生徒の意識や行動に変化が起こりつつあることがうかがえる。一方で、依然として過半数に達していない項目も多く、十分に主体的な学びや社会参画が浸透しているとは言い難い状況である。特に「学校外の人に話を聞きに行く」や「地域課題の解決方法を考える」などが 3～4 割台にとどまっている点からも、さらなる地域連携や探究学習の深化をしなければならない。自分の関心ごとを社会との関係の中で把握すること、また、地域課題を自分ごとにするための問い直しをしていく必要がある。

探究活動を支える教員のファシリテーション力や、学習成果を地域へ発信しフィードバックを得る仕組みづくりも重要だと考える。

少子化が進む中で地方の高校が地域の未来を支える拠点となるために、今の取り組みを入り口と捉え、より踏み込んだ学習設計と地域連携を強化を試みたい。